先輩さんと後輩ちゃん

サリチル酸

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

先輩さんと後輩ちゃんのちょっとしたお話。

目次

第一話　後輩ちゃん　1
第二話　当たり前の放課後に　9
第三話　先輩さんの受難ｉｎ文化祭　19
第四話　後輩ちゃんの質問ｉｎ文化祭　28
第五話　突撃！隣の先輩さん　37
第六話　お母様は優しいです　46
第七話　二人の夜　56
第八話　自分のことを本編だと思っている短編集　67
第九話　癒しと暴走　79

第一話　後輩ちゃん

なんの変哲もない放課後。
なんの変哲もない図書室。
いつも通りに手続きをして、いつも通りに仕事を終わらせる。
下校時間になり、いつも通りの片付けを済ませる。
そして

「……ねえ後輩ちゃん、もう図書室を閉めるんだけど」
「ならば一緒に帰りましょう、先輩さん」

いつも通りに一緒に帰る。
これは、そんな二人のいつも通りのお話。

第一話　後輩ちゃん

図書室を閉め、教科書の詰まったバッグを持って、後輩ちゃんと一緒に鍵を返しに職員室に向かう。
職員室から図書室までは距離があるから、先に校門に行ってもいいとは言ったのだが……
「別に職員室までついてこなくてもよかったんだよ？」
「先輩さんが逃げないようための監視です。勝手に一人で帰られたら困りますから」
「そんなことやりかねない人間だと思われてたんだ……」
後輩ちゃんと知り合ってから結構な時間が経つのに……
「さすがに嘘ですよ。……だからその愛犬に手を噛まれた人のような哀愁にまみれた顔をやめてください。微妙に不快ですよ？」
それは僕が後輩ちゃんを犬のような感情で見ているということだろうか？
……割と的確な表現かもしれない。

後輩ちゃんはどちらかというと猫だけど。
「てい」
イイッ→タイ←スネガァァァ→
「……ねえ後輩ちゃん、なんで僕は脛を蹴られたの？」
「明らかに失礼なこと考えてましたよね、先輩さん？具体的には私が犬っぽいとか猫っぽいとかそんな感じの」
エスパーかなこの娘。
後輩ちゃんが非常にきれいな笑顔で威圧してくる。ここでＹＥＳと答えたらもう一撃飛んでくるのは明らかだ。ならばここで取るべき選択肢は――
「いや、後輩ちゃん、僕がそんな失礼なこと考えるはずが」
「ちなみに嘘ついたら次は太ももに叩き込みますよ？」
どうやらこの選択肢もアウトのようだ。心なしか後輩ちゃんの威圧が増加したように感じる。
そうなると許してもらうには、
「ところで先輩さん、最近駅前にアイス屋さんができたそうですよ。あと特に意味はないですけど無性にアイスが食べたい気分なんです、私」
「……３００円以内でお願いね？」
今日も今日とて後輩ちゃんにおごらされるのであった。

もっきゅもっきゅもっきゅ
後輩ちゃんが食べているのはレギュラーサイズのダブルアイス。僕が食べているのはレギュラーサイズのシングルアイス。締めて１０９０円。
……まさかアイス二人分で千円以上かかるとは、この海のリハクの目をもってしても読めなかった。
「どう、後輩ちゃん？気に入った？」
「はむっ、このチョコチップと、もきゅ、バニラアイスとの、むにゅ、コンビネーションが、くにゅ、最高で、はむ」
「ちゃんと飲み込んでから喋ろうね？」

一心不乱にアイスにかぶりつく後輩ちゃん。どうやらいたくお気に召したらしく、機嫌もちゃんと戻ってる。
「ふう、ご地租様でした。とても美味しかったです、先輩さん」
……まあ、この笑顔が見れたのなら千円ぐらいは安いものだ。
「これなら毎日食べても飽きませんね！」
「それは勘弁してください」
千円は高校生にとって死活問題なんですよ、後輩ちゃん？
「こんなかわいい後輩におごれるなら本望じゃないですか」
「いや、うん。そうかもしれないけど……」
実際、後輩ちゃんは相当かわいい。ハーフ特有の金色の目、ふつくしい金色の髪、それらと童顔・低身長が相まって、トップクラスの「かわいさ」を演出している。学校の中でも一番かわいいのは彼女だろう。ただ――
「珍しいね、自分からそんなこと言うなんて」
「……ただの冗談ですよ。真に受けないでください」
後輩ちゃんは自分の容姿にいい印象を持っていない。……詳しく聞いたことはないが、男子からの目線、女子からのひっがみ、その他いろいろあったのだろう。冗談でもあんなことを言うことはなかなか無い。だから後輩ちゃんがこういうことを言う日は――
「何かあった？」
「……」
大抵彼女にイヤなことが起きた日だ。
今までも何度かこういう日はあった。
思えば職員室まで付いて来たり、いつもより明らかに高い値段のアイスをねだって来たり――後輩ちゃんなりのメッセージだったのかもしれない。
「……食べ終わりましたし、ちょっと移動しましょうか。先輩さん」
後輩ちゃんの提案で席を立つ。
行先はいつもの場所だ。
「ここはやっぱりいいですね。いつも静かで気持ちいいです」

僕と後輩ちゃんがやってきたのはとある河川敷。後輩ちゃんと出会ったばっかりの頃ちょっと特別なことがあって、それ以来何かあると二人で向かう少し特別な場所。
「……今日ですね、告白されたんです。見も知らぬ人に」
後輩ちゃんはよく告白される。かわいいのだから当然といえば当然なのだが。
「……私、まったく自慢じゃないですけどそういうのに慣れてますから、いつも通りに断ろうと思ったんです。ただ、その時ふと思って聞いてみたんです。『私の外見以外にどこが好きなの？』て」
「うわぁ……」
それはちょっとかなりめんどくさい質問じゃ……
「ドン引きしないでくださいよ、私だって悪いことしたと思ってるんですから」
顔が引きつっていたのだろう。後輩ちゃんが不満げに抗議してくる。
「話を戻しますよ？そしたらさっきの私に告白してきた人、いろりいろと言ってきたんです。『落ち着いた雰囲気』とか『静かなところ』とか……」
いったん言葉を区切り、後輩ちゃんはこちらを向いた。
「それで思っちゃったんです。私ってホントに外見しか見られてないんだなーて」
……そんなことはないんだけどなぁ
いったん言葉を区切り、後輩ちゃんはこちらを向いた。
「……ねえ先輩さん。私の魅力的なところってどこですか？」
「ちょっと待ってなんでこの文脈でそんな質問が飛んでくるの？」
「つべこべ言わずにさっさと答えてください。ほらあと5秒以内に」
ちょっと無茶ぶりが過ぎませんか後輩ちゃん⁉
「ごーおー、よーん、さーん、にーいー、いーち！」
さっきまでの落ち込み具合は何だったのかといわんばかりに、後輩ちゃんが無表情ながらもすごいイキイキしながらカウントする。絶対にこちらの反応を楽しんでいる。

えーと、えーと、後輩ちゃんの魅力的なところ、魅力的なところ……！

「図書室で仕事終わるまで待っててくれるところやそのこと指摘したらちょっと顔をそむけながら照れ隠しするところや何だかんだ言いながらも落ち込んでるときは慰めてくれるところや美味しいものを食べてる時の笑顔がすごくカワイイところやちょっと存在に気付いてないふりをしたらすごい必死に気付いてもらおうとするところやそれでも気付かないふりをしていたらすごい泣きそうな顔でこっちに来るところや一緒にいると純粋にすごく心地いいところや……！」

あとはちゃんと無茶なお願いはしてこないところ！あとは、ええと……！

……あれ？

「……

そこには顔を真っ赤っかにした後輩ちゃんが。

あ、後輩ちゃんが口をパクパクさせてる。かわいい……じゃなくて！

やばい、テンパりすぎて本心を吐露しすぎた。

「……」

「……」

お互いに気まずい沈黙が続く。

「……」

「……」

そのまま何秒か何分か経過する。

いい加減この沈黙に耐え切れず、何とかしなければと覚悟を決めて、

「と、とりあえずこれでいいの……かな？」

「……」

後輩ちゃんからの返事は無い。

確かに僕からあんなこと言われても困るだけだろうしなぁ……

まあ、それはともかくさっさとこの話題から離れないと。この話題を続けてたらお互いに精神が削られる。……というか少なくとも僕

のほうが恥ずかしくて悶え死ぬ。
「そ、そろそろ暗くなってきたし、帰らないとだね！後輩ちゃ――」
「待ってください、先輩さん。一つだけ確認したいです」
こちらの服の袖をつかみ、さっきまで黙っていた後輩ちゃんがこちらを見上げて僕を引き留める。
その姿がとてもかわいらしくて、でも同時に嫌な予感がビンビンして――
「その……さっきの先輩の話って……全部ほんとのことですか？」
やっぱりその話題ですよねコンチクショウ。
やばい、どうやってごまかそう……嘘でしたとか言えるような雰囲気じゃないし、かといって本当のこと言ったら自分の羞恥をつかさどるパラメーターが吹っ切れる……どうすれば。
そんな感じに考えていたら気付た。気付いてしまった。
後輩ちゃんが本当に不安そうな顔をしていることに。
いつもはもっと無表情な後輩ちゃんの顔が切実に何かを求めていることに。
……後輩ちゃんが何を不安に思っているのかは分からない。
……ただ、こういう時は
「後輩ちゃん」
こちらから後輩ちゃんの目をのぞき込む。
後輩ちゃんはピクッと反応した後、恐る恐るこちらの目を見る。
やっぱり後輩ちゃんは何かを期待しているような、不安に思っているような顔で――
……嘘をついちゃダメだよな
「……さっきの言葉は、すべて、本心です」
言葉を伝える。今の彼女に嘘をつくことだけは絶対にできなかった。
……たとえ家に帰った後、布団の中で悶えることになるとしても
「……」
「……」
お互いを見つめあったまま、再び沈黙が続く。

そこで初めて後輩ちゃんの顔が近くにあることを感じる。
間近で見る彼女の顔が、目が、頬が、鼻が、眉毛が、唇が、いつもの後輩ちゃんより何倍にも魅力的に思えて――
マズイマズイマズイ！何がとは言わないけど相当ヤバい！ここ外だし！人の目があるし！ここで暴走したらどこまでするか自分でもわからないし！何としてでも耐え……耐え……耐え……耐え……られんかもしれん、これは。
もういっそこのまま激流に身を任せてもいいんじゃないかと思った時――！
「……ありがとうございます、先輩さん」
後輩ちゃんの素直な感謝。
……その時の後輩ちゃんの笑顔は、邪な考えが一気に吹っ飛ぶくらいには美しく、神々しいものであったという。

「今日はありがとうございました、先輩さん」
「うん。お役に立てたようなら何よりだ」
帰り道の異なる、駅のホームで後輩ちゃんと別れる。今の後輩ちゃんはスッキリとした顔を見る限り、もう大丈夫だろう。……ちゃんと僕の新しい黒歴史が仕事をしてくれたようである。
「また何かあったら言いなよ？出来ることなら相談に乗ってあげるから」
まあ今日みたいなのはゴメンだけど
「……本当に先輩さんは優しいですね」
「そうかな？」
「ええ、私が今まで出会った人の中で一番優しい人かもしれません」
優しい笑顔で後輩ちゃんが言う。
そこまで言われるとさすがに照れるなぁ……
心の中で少し悶えていると、後輩ちゃんが急にこちらに近づいてきた。その顔はさっきとは違ってイタズラを思いついたような少し悪い顔だった。今度は一体何をされるのかと身構えていると――

「……私、先輩さんのそういうところ、大好きです」
彼女は僕の耳元でささやいた。
突然の告白に心臓がフリーズする。あまりの衝撃に体を動かすことも、何か喋ることもできない。そんなこちらの状況を知ってか知らずか後輩ちゃんは何事もなかったかのように僕と距離を取り、
「それじゃあまた明日です。先輩さん♪」
そう言い残して電車の中に消えていった。
いまだに数秒前に起こったことに対して頭の理解が追い付かない。いまの自分の心境すら整理することができない。
ただ、わかることが一つだけ。
「……後輩ちゃんも恥ずかしかったんだなぁ」
電車に入るときの後輩ちゃんの顔も、真っ赤になっていたことだけである。

……ちなみに翌日、当然のごとく二人の帰り道が気まずいものとなったのはまた別のお話。

第二話　当たり前の放課後に

まだ暑さの残る十月上旬。
例の黒歴史大爆発から数日後の放課後、僕と後輩ちゃんはいつものように一緒に下校していた。
今日のおごりはコンビニのガリガリ君。こないだの一件で千円以上飛んだのでやむなしである。
シャリシャリシャリ
まあ後輩ちゃんが満足してるのでＯＫだが。
「……ふう、ごちそうさまでした」
後輩ちゃんがペロリとたいらげ、きちんとお礼を言う。
「それにしても美味しそうに食べるね」
「異常なくらい暑いですからね……もう十月ですよ？さっさと寒くなればいいのに」
「でも寒くなったらなったで早く夏になれって思うんでしょ？」
「……否定はしません」
例の一件から後輩ちゃんとの距離感が変わることは別になかった。いまでも、一緒に下校するこの関係が続いている。……まあ一時期はとても気まずかったが。
「そういえば、先輩さん。先輩さんは文化祭で何をするんですか？」
「ん？今年も図書委員会で……ああ、そっか。後輩ちゃんは今年が文化祭初めてか」
うちの高校は１０月に文化祭がある。高１から高３まですべての生徒が参加し、特に高３にとっては高校生活最後の行事であるため大いに盛り上がる。
「図書委員会は毎年古本市場を出店しててね。今年もそこでお仕事だ」
「古本市場！そういうのもあるんですね……」
「まあうちの文化祭は基本的になんでもＯＫだから」
高１の時、売店でカエルの丸焼きやら教師同士のカップリング同人

誌が売っていて学校の行く末に一抹の不安を覚えたのは良い思い出だ。
「なんか簡単そうな仕事ですね、いいなぁ……」
「そういう後輩ちゃんはクラスで出し物するんでしょ？なにするの？」
高1はクラスごとに出し物を、高2高3はクラスや学年関係なく好きなグループに入って出し物をするのがうちの文化祭でのルールである。まあ、僕みたいに委員会やらクラブがらみのグループで参加する生徒が大半であるが。
……とまあ、そんなことはどうでもいい。それより今は、
「……」
さっきの質問以来黙りこくってしまった後輩ちゃんの心配をするべきだろう。
もしかして……
「まだ何をするかすらも決まってない……とか？」
「……」
……確か残り一週間だった気がするのだが。
「……最初はみんなまじめに議論してたんですよ？だけど何をするかをきっかけにに上位カーストの女子同士の対立が深まっていきまして……」
何だろう。もうオチが読めた。
「それで終わったらよかったんですけど……そこに何も考えてない男子の無責任な発言やら教師の無駄な説教やら他のクラスからの煽りやらが合わさりまして……」
思ったよりひどかった。
「しかもアイツら無干渉を貫こうとした私を引っ張り出してきて……先生や実行委員やらは使い物にならないし、女子はもっての外だし、男子どもは最初からメイド服としか言わないし……」
マズイ、後輩ちゃんから黒いオーラが。
「ああ、うん。その……なんか聞いてごめんね？」
「はぁ、いいんですよ。先輩さんは何も悪くないですし……」

そう言いつつもやっぱり今の後輩ちゃんには元気が無い。何とかできればいいのだけれども……
「まあそれはいいとして……」
イイノカナー？
「その……先輩さんにちょっとお願い事がありまして……」
急にもじもじしながら後輩ちゃんが言う。
「後輩ちゃん、今日はもうガリガリ君食べたでしょ？今日はもうおごらないよ？」
「……先輩さんは私を食欲の塊か何かとでも思ってるんですか？」
思ってないと言えば嘘にはなる。
イヤだがしかしそれぐらいしか僕にお願い事することなんてないと思うのだが……
「あのですね、実はこないだ父親が映画のチケットをもらってきまして……」
うんうん
「ちょうどそれが二枚ありまして……その……」
うんうん
「一人で行ってもいいんですけど、余ったらもったいないなーと思いましてね？だから……」
うんうん、うん？
もしかしてこの流れは……
「今週末一緒に、映画、見に行きませんか……？」
後輩ちゃんが上目づかいで聞いてくる。非常にかわいい。
……しかしこれはどう受け取ればいいのだろうか。
ただの『友人』としてのお誘いなのか？それとも――？
……ん？いや待て……今週末？
「……ねえ、後輩ちゃん」
「は、はい！」
なんだかすごくキラキラした顔で期待してる後輩ちゃんには悪いのだが……
「今週末、文化祭準備で全部つぶれてるんだけど……」

「あっ……」
後輩ちゃんの顔が凍り付く。……そりゃ何をするかも決まってないなら、週末に準備しようとかの話もでてこないだろうなぁ。
というか後輩ちゃんの落ち込み具合が凄まじい。まるでケンシロウに振られた時のシン（イチゴ味）みたいな顔だ。すごくこちらが申し訳なくなってくる。
「……」
「あ、あの。ごめんね？なんかこう……ごめんね？」
ヤバい。申し訳なさ過ぎてごめんねとしか言えなかった。
なんとかフォローしなくては。
「ほ、ほら！確か再来週の月曜日が振替休日だったよね？そこならなんとか……」
「……このチケット、期限が今週末までなんです」
おっふ
「……それにその振替休日、多分先輩さん打ち上げありますよね？図書委員会の」
あべし
「それに先輩さん高3だから、文化祭終わったらもう受験勉強モードですよね？休日とか空いてるんですか？」
……これは詰んでますわ。
ああ、後輩ちゃんの目からハイライトが！
「……いいんですよ別に。楽しみになんてしてませんでしたし……先輩さんとデートする口実が消えたことなんて別に何とも……なんとも……」
なんか後輩ちゃんが膝を抱えてブツブツ言いだした。何を言っているのかは聞こえないが十中八九ネガティブなことだ。絶対涙目になってる。
ただでさえ文化祭のせいでダメージ受けてるのに、このまま放っておいたら明らかにマズイ。なんとか打開策を考えなくては。チケットが使えるのは今週まで。だけど週末は予定で一杯。なら週末以外の日に後輩ちゃんと一緒に……あ、そうだ。

「後輩ちゃん。今から映画見に行かない？」
「……え？」
今から行けばいいのか。

後輩ちゃんと一緒に隣町の映画館に入る。もう何だかんだでもう6時３０分。
「なんだかちょっと不思議な気分ですね……」
「まあ、普通は放課後に来るところじゃないからね」
しかも夜に。高校生二人で。
「確か入場開始が7時からだっけ？」
「はい。結構時間が余っちゃいました」
今日見る映画は恋愛モノ。どこにでもいる普通の高校生に突然義理の妹ができて――というテンプレものらしい。
……どうにも展開が読めそうなのは気のせいだろうか。
「……私から誘っておいて今更なんですけど、これって面白いんですかね？」
「本当に今更な疑問だね……」
気持ちはわかるが。
「まあそれはどうでもいいんです。重要なことじゃありません。」
映画館に来てそれは本末転倒ではないだろうか。
「映画館にて一番大事なこと。それは――！」
「あ、ポップコーンは買わないからね？」
「なん……だと……？」
あ、パンフレット売り切れてる。出来自体は結構いいのだろうか。
……ちょっと楽しみになってきた。
「ちょっと待ってください先輩さん⁉映画館でポップコーン買わないとか狂気の沙汰ですよ⁉」
「いやポップコーンて結構高いし……それに夕食前なんだからおやつ食べちゃダメだよ？」
「オカンですかあなたは！」

そんなこと言われても。
「ポップコーン！ポップコーン！ぽっぷこーん！」
本当に高校生かこの娘。
「いやちょっと落ち着いて……」
「かってくーだーさーいー！」
「大丈夫⁉なんか幼児退行してない⁉」
いつものＣＯＯＬな性格はどこ行った！
ちょっとおかしくなった後輩ちゃんを心配していると、その後輩ちゃんが急に静かになった。
そして涙目でこちらを見上げながら……
「先輩さん……ほんとに……買ってくれないんですか……？」
こうはいちゃん　の　こびをうる　こうげき！
こうか　は　ばつぐんだ！
「い、いやでも……」
「……」
こうはいちゃん　は　なみだ　を　ためている！
「あ、あの。えっとね？」
「だめ……なんです……か……？」
こうはいちゃん　の　うそなき！
せんぱい　は　めのまえ　が　まっくらになった！
「……
一番小さいサイズね？」
「ありがとうございます、先輩さん！愛してます！」
愛って安いんだなぁ……

ほくほくな顔でポップコーンを持つ後輩ちゃんと一緒に入場する。
結局ポップコーンはＭサイズのものを買わされた。６００円のキャラメル味である。一応僕と後輩ちゃんの二人分ではあるが。
「楽しみですね、先輩さん！」
「ウンソウダネ」

こちらの財布の寂しさも知らずに後輩ちゃんがはしゃいでいる。
……まあ、もう失ってしまったものは仕方がない。今は映画を楽しむとしよう。
それにしても……
「映画館で映画を見るのは久しぶりだな……」
「そうなんですか？」
「1年ぶりくらいかな？確か友達と一緒に来たんだよ」
うん、思い出した。
確か決闘者な友達に『映画特典ほしいから一緒に見てくれ！』て頼まれて……映画代まで出してくれたんだった。
「それ以来は別に見たいものもなかったし……特に機会も無かったから」
「そうですか……」
「そういう後輩ちゃんは？」
個人的にはあまり来そうなイメージが無いのだが……
「私は結構来ますよ？父親と一緒に」
「それは珍しい」
高1の女の子なんて一番父親から離れている時期だと思うのだが。
「そりゃ土下座されながら頼まれたら行くしかないじゃないですか」
なるほどそういう素直なタイプの父親か。
……それにしたって相当ひどいが。
そんな哀れすぎる父親に思いをはせていると、後輩ちゃんが急に歩みを止めた。
何事かと後輩ちゃんを見ると――
「……でもですね、友達と一緒に来たことはなかったんです」
そこには悲しそうな後輩ちゃんがいた
「私はいつも友達が少なくて、いつもそれが当たり前で」
少しずつ言葉が紡がれていく。
「中学校でもいつも一人で。慣れたつもりでもやっぱり羨ましかったんです。一緒に遊んでくれる人のいる、普通の人たちが」
それはとても悲しくて。

「そのまま中学校を卒業して、高校に入って。それでもやっぱり独りぼっちのままで」
そんな顔をこれ以上みていられなくて。
「ずっとこのままなんだなって思って――」
気が付くと後輩ちゃんを抱きしめていた。
もう後輩ちゃんにそんな顔をしてほしくなかったから。
後輩ちゃんにはもっと笑ってほしかったから。
「……すいません。気を使わせてしまいましたね」
特に抵抗することもなく、僕に身を任せて後輩ちゃんは話を続ける。
「だから今、すごくすごく嬉しいんです。先輩さんと出逢って、一緒に帰るようになって、映画を一緒に見て……そんな当たり前のことがすごく嬉しいんです」
……そんなことを言う後輩ちゃんの声は本当に本当にうれしそうな声で。
「だから先輩さん。今日はありがとうございます。それしか言う言葉が見つかりません」
このままの後輩ちゃんにしておきたくなくて。
「後輩ちゃん」
「なんですか？先輩さん」
だから僕は。
いつも通りに戻りそうな後輩ちゃんに――
「……いつでも呼んで」
「ふぇ？」
「いつでも、どこでも、僕を呼んでくれていい。
絶対後輩ちゃんに会いに行くから」
――だから、もう二度とそんな顔をしないでくれ。
そんな告白まがいなことを言った。
「……」
「……」
沈黙が続く。そんな中、後輩ちゃんがつぶやいた。

「……いいんですか？そんなこと言って」
「うん」
「私、相当めんどくさい女ですよ？本当にいろんなところで呼び出すかもしれないんですよ？それでも……」
「うん。それでもだ」
——君の笑顔を守れるなら。
再びの沈黙。それを破ったのも再び後輩ちゃんだった。
「……すいません。ちょっとこのままにさせてください」
そういって彼女は僕の胸元に顔をうずめた。
その後しばらく彼女は泣いた。
これまでの孤独をいやすかのように。
しばらくたった後、後輩ちゃんは泣き止んだ。
どちらからともなく抱き合うのをやめ、見つめあう。
「……ありがとうございました、先輩さん」
「どういたしまして」
「みっともないところ見せてしまいましたね。……でもそれも、先輩さんにならいいかもしれません」
そう言う後輩ちゃんの顔は、涙の跡はあっても悲しみのない、とても晴れやかなものであった。
「スッキリしたようでよかったよ」
「ええ、先輩のおかげです」
——ああ、やっぱり後輩ちゃんには笑顔が似合う。
「さて！それじゃ、気を取り直して映画を見ましょう！」
「うん！」
この笑顔のためなら何でもできると思えるほどに。

「……あれ？そういえばポップコーンは？」
「……あ」
その後、泣きそうになる後輩ちゃんと一緒に、抱き合った衝撃でしっかり床にばらまかれていたポップコーンを回収するのだが……
それはまた別のお話。

第三話　先輩さんの受難ｉｎ文化祭

後輩ちゃんと映画館に行ってから一週間後の土曜日。今日から二日間、文化祭である。
教室の一つを借りて図書委員会は古本市場をおこなう。今年は僕もその主要メンバーの一人だ。
「先輩！雑誌はここでいいですか！」
「その一つとなりの机でお願い！それと５０円の看板つけといて！」
「実行委員長！値札のついてない本が！」
「それは１００円均一のやつだから大丈夫！」
「先輩！机が一つ足りません！」
「図書室からとってきて！」
「ちくわ大明神」
「誰だ今の」
というか今回の古本市場、僕が最高責任者だったりします。
本来なら当然のごとく図書委員長が指揮を執るのだが――
「うん、ちゃんとできているな。関心関心」
このクソ忙しい中、悠々とカウンターの椅子に座りながら本を読んでいる黒髪美人巨乳黒タイツ図書委員長（友人談）に押し付けられたため、こうして僕が指揮を執ることになったのである。
「ん？何か言いたそうな顔だね。いいよ、何でも言ってごらん？」
憎たらしい笑顔で我らが図書委員長が言う。非常にむかつく。
「……ほかの場所で本読んでくれない？」
「別にいいだろう？特に邪魔をしているわけでもないし。それともキミは目的のためなら静かに読書に勤しむ一般生徒を教室から放り出すような外道だったかな？」
「お前のどこが一般生徒だ」
「そうかそうか。つまりキミはそういう人間だったんだな」
「エーミールかおのれは」
こんなのでも彼女はこの学校の人気者だ。その見てくれとカリス

マで、女子生徒主催の『お姉さまにしたい人ランキング』、男子生徒主催の『黒タイツ越しに踏んでほしい人ランキング』、男女合同主催の『Mに目覚めさせてくれる人ランキング』これら全てで堂々の第一位に輝いているらしい。

……こんなランキングが出回っているあたりこの学校はもう終わりじゃないだろうか。

「実行委員長！本部の人が来てます！」

「ちょっと待って今行くから！」

そうだ、こんなことで時間食ってる場合じゃねぇ！

「ほらほら、まだ設営は終わってないぞ？さっさと仕事に戻り給え、実行委員長くん」

「やろう、ぶっころしてやる」

「先輩！図書委員長といちゃつくの止めて手伝ってください！」

「解せぬ」

そんなこんなで図書委員長の妨害はあったものの、無事設営は終わり――

高校最後の文化祭が始まった。

……とはいってもほとんどの時間が店番でつぶれるわけですが。最高責任者は楽じゃない。

「これください」

「５冊で５００円です。ご利用ありがとうございました」

別段とても忙しいこともないが、常に何人かの客が入る。それが古本市場のいいところでもありめんどくさいところでもある。まあ、常に激務な飲食店とかに比べればホワイトな仕事だ。

「実行委員長、俺そろそろ交代の時間なので……」

「あ、いいよ。お疲れ様」

少なくとも後輩たちの大半にとっては楽な仕事だ。去年までの僕がそうだったように。

そんな風に過去に思いをはせていると、例の図書委員長がやってき

た。
「どうだい調子は？」
「おかげさまで順調だよ。だれかさんが手伝ってくれてればもっと盛況になったとは思うけど」
「そんなことはない。古本市場なら集客数はこんなものが限界さ」
少なくとも僕の仕事量は減っていたと思うんだ。
「ま、それはいいや。ところで、一時からキミは休憩だったよね？」
「ん？そうだけど？」
僕の今日の休憩はその一か所だけ、計一時間。
……まあ、日曜の午後をすべてフリーにしてもらうための致し方ない犠牲である。
「実は行ってみたい催し物があるのだが……一緒に来てくれないか？」
「別に一人で入ればいいんじゃないの？」
わざわざ俺の貴重な休憩時間をつぶしてまで行く必要はない気がする。
「それがお化け屋敷でなければな……さすがにお化け屋敷に一人で入るのは寂しいものがあるだろう？」
人それぞれだと思うが。
「僕意外にも友達がいるんじゃないの？」
「残念なことに今日は都合が合わなくてな」
ふーむ。だが僕も昼食の時間が必要だし……
「その様子だとダメそうだな……わかった。仕事頑張ってくれ」
特に気にすることもなく委員長は教室を出ていこうとする。
そんな時、ふと気になったことがあった。
「……図書委員長、ちょっと聞いていい？」
「ん？なんだ？」
「そのお化け屋敷、主催はどこ？」
「確か一年のD組とE組の合同企画だったと思うが……それがどうかしたのか？」
「……やっぱり一緒に行こうか」

一年D組は後輩ちゃんのクラスだから。

時間が経過し一時になる。

あれから特に異常はなく店番は終わった。せいぜい妹と母親が様子を見に来たくらいである。

委員長との約束は一時半にお化け屋敷の前に集合、というものである。昼飯を食べてから少し早めに目的地に向かう。それにしても……

「やっぱり合同主催になったんだ……」

映画館の時から気にはなってはいた後輩ちゃんのクラスの出し物、一週間前でさえ何をするか決めていなかったものを成功させるには『ほかのクラスに寄生する』しかないとは思ってはいたが……その予想が的中してしまった。まあ、そんなこともいい思い出になるだろう。

「……ここか」

そうこうしているうちに目的の教室に到着。待つお客はいなさそうなので、とりえず一安心する。

「あ！お客さんですか？ようこそお化け屋敷へ！」

そう言って出迎えてくれたのは入り口前で受付をしていた魔女っぽい服を着た女の子。

「ああ、ちょっと待ってね。もう一人来るから……」

「はい、わかりました！」

せっかくだから後輩ちゃんは何をしているのか聞いてみようか……と思った時。

ふと魔女っ娘の隣を見るとそこには――

「……何やってんの後輩ちゃん」

「……おや、先輩さんでしたか。お久しぶりです」

真っ白なシーツを頭からかぶった後輩ちゃんが！

「……いくらなんでも手抜き過ぎない？」

小学生でもやらないようなオバケの衣装だ。体形が小柄だから似

合ってはいるが。
「いいんですよ。どうせ受付のお化けの衣装になんて誰も期待してないんですから」
　隣の魔女っ娘の衣装はそれなりに凝ってるんですがそれは。
「というか、やっぱりほかのクラスに寄生したんだね」
「……言い方は悪いですが、まあおおむねその通りです」
　話を聞いてみると、どうやら最終的に教師がお膳立てしたらしい。
「そのころになると、クラス全員がもう無理って感じの雰囲気でしてね……結局、合同開催ということにして教室と資金を譲渡、店番とかの雑用を引き受けることで決着しました」
「何というか、まあ、お疲れ様」
　これから大丈夫だろうか後輩ちゃんのクラスは。どうにも修復不能なレベルにまで亀裂が広がっている気がするのだが。
「それで押し付けられた接客のノルマを今日で消化しようと、今日は働きっぱなしなんですけど……先輩さん、ちゃんと明日の約束覚えてます？」
「そりゃもちろん」
　映画館の一軒の後、後輩ちゃんと文化祭を一緒に回る約束をした。ただ僕は仕事が多すぎたので『日曜日の午後』に落ち合う約束になったのだ。
「ならよかったです……忘れないでくださいね？」
「大丈夫だよ」
「……私、結構楽しみにしてるんですから」
　そう言って後輩ちゃんは顔を背ける。ちょっと顔も赤い。かわいい。
　もともと楽しみだったが、この後輩ちゃんの反応を見る限りもっと楽しいものとなりそうだ。
「やあ、待ったかい？」
　そんなタイミングで図書委員長はやってきた。

「僕もさっき来たところだよ」
「それならあと十分は遅れてもよかったか……」
「……知ってる？僕の休憩は六十分しかないんだよ？」
「もちろん知ってて言ってるさ」
こんにゃろ
「そんな事よりいいのかい？後ろの娘を放っておいて？」
なにか面白いものでも発見したかのような笑みで図書委員長が言う。
後ろの娘？
そう思って後ろを振り返ると――
「……」
後輩ちゃんがいた。
真後ろに後輩ちゃんがいた。
ハイライトの消えた真顔でこちらを見ている。正直言ってとても怖い。
「……」
なんで何も言わないんですか後輩ちゃん⁉
というかなんで後輩ちゃんはこんな状態に……さっきまではいつも通りだったのに。
な、何とかしなくては……
「こ、後輩ちゃん？あの」
「センパイサン？」
「はい⁉」
勇気を出して言った言葉は後輩ちゃんのカタコトな言葉で遮られる。
ヤダこの娘超怖い！
「……なんでその雌犬と一緒にいるんです？」
雌犬⁉雌犬って言いましたか後輩ちゃん⁉
というか、雌犬って……
「……何かしたの？図書委員長」
「うん？君がいないときに図書室で少しちょっかいを出していただけ

だが？」
「あれのどこが少しですか雌犬」
　妙に後輩ちゃんが不機嫌な日があると思ったら、こいつのせいだったのか。
「それより私の質問が先です先輩さん。……なんでこんなのと一緒に文化祭を回ってるんです？」
　どうやら図書委員長（雌犬）と一緒にいるのが後輩ちゃんはお気に召さないらしい。
　というか……
「いやいや、そもそも今日見に来たのはお化け屋敷だけ……」
「そうそう！コイツの方から誘ってきたんだよ！」
　なんでこのタイミングんで嘘ぶち込んでくるんだ雌犬図書委員長。
「……へえ、そうなんですかセンパイサン？」
「いやいや！そんなことないから！」
「お互い恋人のいない者同士だし？高１の時からの付き合いなんだから最後の文化祭くらい一緒に回ろうって話になってねぇ～」
　もうやだコイツ。
　そして後輩ちゃんの反応が怖すぎる。
「しっかし楽しかったわよｗｗｗコイツとの恋人ごっこォ～～～！」
「どこまで嘘つけば気が済むんだお前は！というかだいたい恋人ってお前――」
「センパイサン？」
「ハイ！」
　ダメだ！後輩ちゃんが信じちゃってる！
「今は受付の仕事があるから深く聞きませんけど……」
　後輩ちゃんは一拍おいて
「アシタ　ゼンブ　ハナシテ　クダサイネ？」
「ア、ハイ」
　形容しがたい笑顔でそう言った。
　……この後入ったお化け屋敷なんて目じゃないほど怖かったことだけここに書いておく。

こうして後輩ちゃんのこと（恐怖）しか残らなかったお化け屋敷を終え、僕は古本市場へ戻ろうとしていた。
……なぜか図書委員長と一緒に。
「……ねえ、なんでついてきてるの？」
「なんとなくだよ。悪いかい？」
「悪いわ」
あんだけ俺の心に恐怖を刻んでおいてコイツは。
「はは、そう邪険にしないでくれ。あんな見え見えの嘘に引っかかる彼女が悪いんだから」
彼女とは後輩ちゃんのことだろう。
……コイツはなんであんな嘘をついたのだろうか？
「ん？私があんな嘘ついた理由かい？」
こちらの表情に気が付いたのか、図書委員長の方から言ってきた。
「なんとなーく？おちょくりたくなるんだよね、彼女」
「理由になっとらん」
後輩ちゃんのためにも、もっと詳しく。
「うーん、これはあまり言いたくないんだが……まあいいや」
そう言って図書委員長はこちらの目を見て話しだした。
「多分似てるんだよ、うじうじしていた頃の私に」
「うじうじ？」
「そう、好きな人に対して一歩踏み出せずうじうじしてた頃の私に」
「……」
それは
「後輩ちゃんが……」
「そう。キミもいい加減気付いてるだろ？彼女の恋心に」
何でもないことであるかのように図書委員長は言う。
……気づいてないと言えば嘘になる。というかあれだけ親密になって、後輩ちゃんをそういう対象として見ない方が不自然だろう。だけどそれは――
「いや、キミが最後の一歩を踏み出せない理由はちゃんとわかってる。

それとは別に、これは彼女の問題だよ」
遠い目をして図書委員長は言った。
「……彼女には、私みたいなことをして欲しくないからね。だから色々ちょっかいをかけちゃうんだよ」
そう言う彼女の顔には、確かに哀愁が漂っていた。
「……でも、最終的にちゃんと結ばれたんだろ？」
「私の時はね。でも彼女もそうなるのかは分からないだろう？」
……それは、僕次第ということのだろうか。
「まあ、結局は彼女がキミをその気にできるかどうかだ。キミはいつも通り彼女に接してあげればいい」
「そんなこと言われても」
こんな話の後にいつも通りは難しい。
「ま、結局最後は二人の問題だよ。頑張りたまえ。せいぜい応援してやろう」
「なんで上から目線なんだお前は……」
まあそれでも
「……頑張ってみるよ」
何だかんだで応援してくれるコイツと友人になれてよかったとは思った。
こうして一日目は終わり、文化祭は二日目に突入する。
いよいよ後輩ちゃんとの文化祭だ。

第四話　後輩ちゃんの質問ｉｎ文化祭

文化祭二日目。開催日が日曜日なのもあって一日目よりもお客は多い。

とは言ってもそれは古本市場にとってそれほど関係なく、

「……」

後輩ちゃんのことで頭がいっぱいの僕にとってはまったくもって関係ない。

「……実行委員長」

昨日後輩ちゃんの恋心だなんだと言われたせいで、あの後からずっと考えがまとまらない。僕の気持ちはどうなのか、後輩ちゃんの気持ちはどうなのか。そればかり考えている。

「……実行委員長？」

そもそも本当に後輩ちゃんは僕のことが好きなのだろうか？確かに何度も優しいことをしてるし、映画館ではあんなことを言ったが……それでも後輩ちゃんが僕を『いい友達』と思っている可能性は十分あるわけで……

「……実行委員長！」

そんな後輩ちゃんに対して僕はどういう感情を抱いているのだろうか？後輩ちゃんはかわいいし友人以上の関係を僕が望んでいることは自分でもわかる。

ただ『彼女』への気持ちがまだしっかり残っていることもまた事実で――

「実　行　委　員　長　‼」

うぉん！びっくりした！

「急に耳元で怒鳴らないでよ……」

「さっきから何度も呼びましたよ。……大丈夫ですか？昨日の昼から明らかに様子がおかしいですよ？」

そう言うのは図書委員会の後輩の一人だ。

「たぶん大丈夫……かな？」

自分でも大丈夫かわからないもので。
「……まあいいです。そんな事よりいいんですか？」
「ん？なにが？」
なにかミスでもしてしまっただろうか？
「もう実行委員長のシフトとっくに終わってますけど」
……ゑ？
慌てて時計を見る。
シフトの終了時刻は１２：１５．
後輩ちゃんとの待ち合わせは１２：３０．
現在の時刻は１３：００．
「……」
こ れ は マ ズ い で す よ ！
ヤバい！やってしまった！あまりにも上の空すぎた！
昨日の一件で絶対不機嫌なのにこんなことしたら……いや、自己嫌悪は後だ！
今は一刻も早く後輩ちゃんのもとに向かわねば！
「ごめん！あとはよろしく！」
そう言ってから返事も聞かず、全力疾走で集合場所に向かう。集合場所が近いのがまだ救いだ。
無駄に多い人の波をかき分けて、後輩ちゃんに指定されていた教室の前にたどり着く。後輩ちゃんがもういない可能性も十分にあったが――
「こ、後輩ちゃん！ごめん！遅れちゃって！」
後輩ちゃんはちゃんとそこにいた。何やらうつむいているが。
「……先輩さん？」
帰ったりしていなかったので一安心。とりあえず謝らなければ。
「本当にごめん！気づいたらこの時間で――」
「先輩さんっ！」
「ゴフゥ！」
僕の言葉をさえぎって急に後輩ちゃんがタックルばりの勢いで抱き着いてきた。

てかちょっと待って後輩ちゃんの頭がみぞおちに……！
「来てくれた……！よかった……！」
アレ？もしかして後輩ちゃん、泣いてる？ＮＡＮＮＤＥ？
というか痛い痛い！締め付けが強すぎる！
「ちょ……後輩ちゃん……いったん離れて……！」
「……！」（いやいや）

僕の言葉に反応して、離したくないとばかりに首を振り振りしながら抱き着く力を強める後輩ちゃん。
いつもなら抱き着いてくる後輩ちゃんの体の感触にあたふたするのだろうが、
「後輩ちゃ……！くるし……！」
「……」（うー！）
ぶっちゃけそれどころじゃない。みぞおちのダメージに後輩ちゃんの締め付けが加わって――
……あ、これはダメかもしれん。グッバイ現世。

――その後、後輩ちゃんが僕の惨状に気付いて腕を離してくれるまで１５分かかりましたとさ。

「……ホントにごめんね？後輩ちゃん」
「……本当ですよ、おかげで要らない恥をかくことになりました」
あの後、僕を絞殺しかけていたことに気付いた後輩ちゃんはもう一つ大変なことに気付いた。
自分たちが今、思いっきり他人の目がある廊下で抱き合っていたことに。
そこからの後輩ちゃんの行動は早かった。致命的なダメージを負って動けない僕を思いっきり引きずり倒しながら近くの休憩所に逃げ込んだのだ。
「だいたい３０分も女の子を待たせるなんて男として、いえ人間としてどうなんです？」

「……すいません」
ちなみに僕は現在休憩室の床に正座である。まあ、後輩ちゃんにしてしまったことを考えると全然軽い罰だとは思うが――
「私、昨日楽しみにしてるって言いましたよね？それなのに一向にやって来ない先輩さんを私がどんな気持ちで待っていたのかわかります？」
「……すいません」
……後輩ちゃんは、僕たちが生温かい目で回りの人から見られていることに気付いているのだろうか。
「ちゃんと聞いてるんですか先輩さん！」
「聞いてますすいません！」
どうやら後輩ちゃんはそれどころじゃないらしい。激おこだ。
「だいたいどうしてこんなに遅れたんです？電話がつながらなかったのは仕事中に電話を切ってたからなんでしょうけど……」
後輩ちゃんがこちらを見ながら聞いてくる。
……どう言い訳しようか。本当のことを言うわけにはいかないから適当に嘘を
「ちゃんと本当のこと言ってくれますよね？信じてますからね？」
よりこちらを追い詰めるため、裏切ることを許さないニコニコ顔で後輩ちゃんが言う。新しい技を覚えたなこの娘。
……しかしマズイ。この後輩ちゃんに対して嘘はつけない。だからといって『後輩ちゃんと僕のこれからの恋愛感情について考えていたら時間のことを忘れていました』なんてことは言えない。言えるわけない。
「先輩さん？」
今にも鬼に変わりかねない笑顔で後輩ちゃんが追い打ちをかけてくる。
ええい、こうなったらアドリブで真実をぼかしながらごまかすしかない――！
「えーと！後輩ちゃんのことを考えてて遅れました！」
「……ふぇ？」

「……あ」
……（気まずい沈黙）
アドリブでやった結果がこれだよ！
どうしよう！何回目か分からないけど非常に気まずい！
「……えっと」
「……その」
は、話をそらさなくては！周りの人の視線もとんでもないことになってる気がするし！
「そ、そういえば後輩ちゃんはさっきなんで泣いてたの？」
後々考えるとこの質問も相当アレだと思うが、僕も後輩ちゃんも平静じゃなく――
「は、はい！さっき泣いてたのは待ってる途中できっと私は嫌われちゃって捨てられてきっと今先輩さんは私意外の誰かと文化祭を回ってるんだと考えたらとっても哀しくなって自分の気持ちをどうしようもなくなって現実を直視したくなくてそこから動かないでいたら先輩さんが来てくれて捨てられてなかったんだってわかって本当にうれしくってこれからも一緒にいられるんだって安心したら感情があふれちゃ……あっ」
「……」
なんてこった！後輩ちゃんが自爆しちまった！
後輩ちゃんも自爆に気付いたのだろう、さっきまでも十分に赤かった顔がもうヤバいことになってる。そして周りの目もヤバいことになってる。
ええい！後輩ちゃんのためにもさっきの激白は頭の隅に置いてもう一回話題転換しないと――！
「せ、しぇんぱいさん！」
「はい⁉」
後輩ちゃんの方か話しかけてきた⁉
いつもは顔を真っ赤にするだけでフリーズするだけの後輩ちゃんが⁉
「こうなったの全部先輩さんのせいです！いいですね！」

「え⁉いやそれ」
「い　い　で　す　ね　！」
「ハイ！」
　拒否権はない。修羅となった後輩ちゃんの命令は絶対である。
「責任とって今からちゃんと遅れた分もエスコートしてくださいね！」
「え？あ、うん……？」
「あと全部先輩さんのおごりです！」
「ちょっと待って⁉それは」
「い　い　で　す　ね　！」
「ハイ！」
「よろしい！それならさっさと行きますよ！ほら早く！」
　こうして僕と後輩ちゃんの最初で最後の文化祭が始まった。
　……最後まで生温かい視線に見送られながら。

　この後、休憩室を出た僕と後輩ちゃんはちゃんと文化祭を楽しんだ。
　後輩ちゃんが目に付く飲食店に片っ端から入っていき、そのせいで僕の財布ポイントがゼロになったり。
　たまたま見た演劇のクオリティの高さに二人で驚いたり。
　青い占いの出店で明らかにおかしいレベルの占いを披露され、そこで後輩ちゃんの恥ずかしい秘密が暴露されたり。
　図書委員長がミスコンで一位に輝くところを目撃し、そのせいで後輩ちゃんの機嫌が急降下たため機嫌直しのためにさらにおごらされることになったり。
　二人でゆっくり展示を見たり、休憩したり――
　そんなこんなで楽しい時間は過ぎ、文化祭終了まで残り十分。
　僕は急にまじめな顔になった後輩ちゃんに『話がある』と連れられて、人気のない校舎の端まで来ていた。
　……いったい何の話だろうか？
「とりあえず今日はありがとうございました先輩さん。最初の遅刻以

外はとっても楽しかったです」
「……本当にごめんなさい」
それしか言う言葉が見つからない。
「……ふふ、いいんですよ。その分まで楽しめましたから」
「……そう言ってもらえると嬉しいな」
「……」
「……」
しばしの沈黙。どちらも言葉を発しない。
……恐らくここからが後輩ちゃんにとっての本題なのだろう。
意を決したようにこちらを見ながら後輩ちゃんが口を開く。
「……三つ質問したいことがあるんです。先輩さんについて」
「……うん」
こちらも後輩ちゃんを見つめながら質問に身構える。いったいどんな質問が飛んでくるのやら。
「昨日の話ですけど……本当に図書委員長と付き合ってないんですよね？」
なんだその事か。
「それは絶対にないよ。アイツにはちゃんと彼氏いるし。僕とアイツはただの友達だ」
「……ふぅ、そうですか」
アイツとはいつまでも腐れ縁な友人関係であるだろう。
「……二つ目です。今、先輩さんは誰とも付き合ってないですよね？」
「うん」
それも明らかな真実だ。
その答えを聞いてホッとしたような表情をした後、後輩ちゃんは明らかに怯えながら三つ目の質問を口にした。
「……三つ目です」
一拍おいてから後輩ちゃんは振り絞るように言った。
「先輩さん、好きな人いますか……？」
その瞬間、思い出されたのは『彼女』のこと。
二年前に出会い、数か月で僕の前からいなくなってしまった『彼女』

のこと。
人生で初めて恋をした『彼女』のこと。
そして最後になってようやく思いをとどけて――
「……先輩さん？」
不安そうな後輩ちゃんの言葉で我に返る。
……どうにも未だに『彼女』のことを自分は引きずっているようだ。
……それを悪いことだとは思わないが、
「あの、答えたくないのなら……」
少なくとも今だけは後輩ちゃんに向き合わなくては。
「……うん、今でも好きな人はいるんだ」
「……え？」
後輩ちゃんは驚いた顔をした後、泣きそうな顔で聞いてきた。
「そ、それっていったい誰なんですか？」
「昔の同級生。今はもう会えないけど」
「……え？」
「……ごめんね。これ以上は今は言えない」
自分でもまだ整理がついてないから。でも――
「……でも、いつかは絶対に話すから」
後輩ちゃんには聞いて欲しいんだ。
『彼女』と僕がどういう風に出会って
『彼女』と僕がどんなふうに別れたのか。
だから――
「それまで、待ってくれる？」
自分でも自分勝手なお願いだとわかっている。
でもこれしか――
「先輩さん」
そんなどうしようもない僕に対して、
不安に押しつぶされそうな顔で、それでも健気に後輩ちゃんは言う。
「……待ってます」
ああ、本当に。

ここまでされたらわかってしまう。
後輩ちゃんは僕が好きで
僕は後輩ちゃんが好きだと。
衝動的に後輩ちゃんを抱きしめる。
待ち合わせの時とは何もかも違う抱擁。
自分も貴女が好きなのだと伝えるための抱擁。
抱きしめられた後輩ちゃんの様子はわからない。
困惑しているのか、受け入れてくれているのかも分からない。でも

――願わくばこの気持ちがちゃんと届いていますように。

第五話　突撃！隣の先輩さん

早いもので、文化祭が終わってからもう一か月たった。
文化祭のころの残暑は消え去り、季節は冬に移り変わる。
食べ物もいつもよりおいしくなり、町はいつもより活気があるように感じられる。
ああ、本当に素晴らしい季節――
「全員プリントは持ったな？始め！」
いい季節だ。感動的だな。だが無意味だ。
前に言ったかもしれないが、文化祭は高３にとって最後のイベントである。つまりそれは文化祭が終われば後は受験しか残っていないということで。
僕たち受験生にとって季節なんて欠片たりとも関係ない。
今日も今日とて僕は塾でテストを受けていた。
「残り３０分だ！」
当然かもしれないが、さすがに後輩ちゃんと一緒に帰る頻度は減った。今では週一程度だ。
だからといって文化祭の前後で後輩ちゃんと僕の関係が変わったわけではない。いや、ちょっと距離が狭まったかもしれないが。
「残り５分！見直しは済ませたか？神様にお祈りは？点数開示でガタガタ震えて命乞いする心の準備はＯＫ？」
……もう一度見直ししておこう

塾を終えて帰宅の準備をする。
８時までぶっ続けでテストを受けたので、お腹が減ってしょうがない。
『今から帰る』と母親に連絡しようとスマホを開く。すると新着メールが一件入っていた。
……誰からだろ？
気になって開いてみると――

『非常に困っています。助けてください。駅前のサイゼ○ヤで待ってます』
それは後輩ちゃんからのＳＯＳだった。
……て後輩ちゃん⁉
ほんの少し驚くが、すぐに心を落ち着けて考える。
何が後輩ちゃんに起きているかはわからない……だが、僕が受験勉強で塾に行ってるってことも、受験勉強でクッソ忙しいことも知ってそれでも助けを求めてきたんだ。相当大変なことが後輩ちゃんの身に起きているはず。
映画館の約束もあるし急がなくては。
そう結論を出して走ろうとした時、ふと気になったことがあり確認してみる。
『送信　１８：４５』
……一か月ぶりの大遅刻だこりゃ。
……今回はしょうがないよね？

十分後、全力疾走で息も絶え絶えにサ○ゼリヤに到着。メールの時間から考えて一時間半は経過しているのだが、果たして後輩ちゃんはちゃんと無事で――
「おや、先輩さん。早かったですね」
なんか普通に後輩ちゃんがいた。しかも悠々とコーラ片手にニンジャが出て殺す小説を読んでる。僕の心配なんてどこ吹く風だ。
……彼女は何も困っていないのでは？ボブは訝しんだ。
「何ですか先輩さん。そんな妙な顔して」
おっと感情が顔に出てた。
「……思いのほか大丈夫そうじゃん。後輩ちゃん」
「いえ、現在進行形で困ってるんですよ？先輩さんが来てくれて大安心です」
フライドポテトをハムハムしながら後輩ちゃんが言う。どう見ても困っている姿ではない。
「な、なんですかその目は……コーラはちょっとならいいですがポテ

トはあげませんよ？」
「いらない」
後輩ちゃんの前で食い意地はったことなんて一度も無い。逆は数えきれないほどあるが。
「……それで？いったい何に困ってるの、後輩ちゃん？」
勉強しないといけないし、さっさと要件を済ませてしまおう。
さあ、後輩ちゃんにいったい何が――
「ちょっと待ってください、今追加のポテト注文するんで」
「……」
（無言のデコピン）
「いたっ！ちょっと何するんですか先輩さ――」
デコピン。デコピン。デコピン。
「痛い！ちょ、やめ」
デコピン。デコピン。デコピン。デコピン。デコピン。
「痛い！痛い！わ、分かりましたから！話しますから！だから執拗な一点攻めをやめてください！おでこまっかになっちゃいます！」
わかればよろしい。
「うう……痕ができたらどう責任とってくれるんですか……」
その時はその時だ。
「ほら、ちゃっちゃと話しなさい。早く帰って勉強しないといけないんだから」
「……なんか今日は冷たくないですか先輩さん？」
後輩ちゃんの質問に満面の笑みで答える。
「さ　っ　さ　と　言　え」
「はいすいません！」
それでよい。
するとさっきとは打って変わってもじもじとしながら後輩ちゃんが話し始める。
「えーとですね？今日家に帰ったら珍しく母親が会社から戻ってまして……」
ほう、後輩ちゃんのお母さんは会社勤めしているのか。

「最初は普通に雑談してたんですけど、途中から口喧嘩に発展しまして……」
母親と喧嘩する女子高生……
「売り言葉に買い言葉で『こんな家出て行ってやる！』てなりまして……」
あーなるほど。
「ろくにお金も持たずに家を飛び出したので、今日泊まるとこにも……」
「ＯＫだいたい把握した」
つまり家出したので何とかしてください！と……
「……今から謝って家に帰るって選択肢は？」
「絶対にありません」
デスヨネー
明らかに不機嫌になりながら即答する後輩ちゃん。確かにそれができたら僕に相談なんてしないだろう。
というか……
「……お金ないのにポテトやらコーラを頼んだの？」
「……喧嘩してイライラしてたので」
目をそらす後輩ちゃん。この目は何も考えずにメニューを注文した人間の目だ。
しかし確かにそれは困った。普通こういう時は友人の家に泊めてもらったりするのだろうが、知っての通り後輩ちゃんには友達がいないので……うん。
そうなるとホテルに宿泊するくらいしか手段がないが、それには当然そこそこお金が必要で――
「ちなみに今、お金はいくら持ってるの？」
「千円ぐらいですね」
「せんえん」
「あ、でもポテトとドリンクのお会計がありますから……８００円とんで残るのは２００円くらいですね」
「にひゃくえん」

どうあがいても無理。
「……お金が無いからカプセルホテルにも泊まれないし、たしかにちょっとまずいなこれは」
本当に今から謝って家に入れてもらうしかないんじゃ……
そう考えているとと、意外にも後輩ちゃんの方から提案が。
「……で、でも一つだけいい案がありますよ？」
「……それは？」
より顔を赤らめてもじもじしながら後輩ちゃんは言う。
……なぜか嫌な予感がするが、仕方ないので先を促す。
「せ、先輩さんのいえに泊めてもら」
「却下で」
やっぱりそんな内容だったか。
「なんでですか！」
「……高1の女の子を夜中に家に連れ込むとか問題でしかないからね？」
後輩ちゃんは非常にかわいらしくほほを膨らませてこちらをにらみつけているが、それはそれだ。
……さすがに母親と妹がいるので間違いは起きないだろうが、意識してる女の子を家に連れ込むのは健全な高校男子にとってハードルが高すぎる。
……それよりなにより僕がなんか恥ずかしいというのもあるが。
「……」（ぷくー）
だからその不機嫌顔をやめてください後輩ちゃん。
「はあ……」
高校生にとってあまり褒められたことではないが、こうなっては致し方ない。
「……もうお金貸してあげるから今日はホテルに泊まったら？」
「……先輩さんのいくじなし」
なんとでも言え、私とて守るべきもの（羞恥心）があるのだ。
後輩ちゃんとの時間が楽しいのは事実だが、これ以上後輩ちゃんと

一緒にいるのはいろいろまずいし勉強時間が刻一刻削られるのも地味につらい。
　さっさとお金を貸してホテルを見つけてあげて今日のところは別れなくては。
「ほら、そんなムスッとしてないでホテル探そ？ぜったいそっちのほうがいいよ？」
「……」（むー）
「はあ、とりあえずお金を……あ」
　ふてくされていた後輩ちゃんもこちらの異変に気付いた。
「……先輩さん？どうしました？」
「……しまった、今日参考書買ったんだった」
　いつもは一万円くらいを持ち歩いてるからホテル代ぐらいなら貸してあげられると思ってたけど……ウカツ！そうだ今日はたまたま参考書買ったから二千円ぐらいしか手元にないんだ。これだけじゃあ全額貸したとしても、ホテルの宿泊料金は払えない。
「……え？もしかして先輩さん？貸してくれるはずだったお金がないとかですか⁉」
　さっきまでのむくれ顔から一転。明らかに目の色が輝きだした後輩ちゃんが詰め寄ってくる。
「い、いや」
「いやーそうですか！さすがに先輩さんの家に泊まらせていただくのは申し訳ないと思ってたんですが、貸してもらうお金がないのなら仕方ないですね！」
「ちょ」
　今日はすごいぐいぐいくるなこの娘！
「さあ行きましょう先輩さん！あ、別に私の寝床はお構いなく。掛布団さえあれば床に寝れますので！でもお金はないのでご飯は恵んでいただけると幸いです！」
「ま」
「そうだ、手土産に何か持って行ったほうがいいんですかね⁉先輩さんのお母様はいったい何がお好きで――」

「落ち着け！」
「ふきゃん！」
　暴走していた後輩ちゃんを恐ろしく速い手刀で落ち着かせる。
「うう……めちゃくちゃ痛いです……」
「いったん落ち着きなさい！というかお土産買うお金なんてないでしょ後輩ちゃん！」
　そのせいでここまで大変なことになってるんだから！
「で、でもお金ないならもうそれしか手段は……」
「僕の母親にお金貸してもらうように何とか頼んでみる！いまから電話するからそこに座って待ってて！」
「そ……そんな……」
　がっくりと肩を落として後輩ちゃんはしょぼんと席に着く。その姿にわずかな罪悪感が芽生えるが、自分の自制心と勉強のために心を鬼にして電話をかける。
『もしもし～？』
　電話に出たのは僕の母親。微妙に変な喋り方なのもいつも通りだ。
「あ、母さん」
『あら～急にどうしたの～？』
「ちょっとたなびたいことがあるんだ」
　そうして事の顛末を母親に伝える。後輩ちゃんのためにお金を貸してほしいことも。
『なるほど～だからお金を～？』
「うん、お願い」
　後輩ちゃんのためなので真摯に頼み込む。
　……その当本人である後輩ちゃんは机に突っ伏してぐでんとしながらこちらをにらめつけているが。
『う～ん、状況はわかったけど～』
「けど？」
　どうにも母の反応は芳しくない。
　……やっぱり『高校生にむやみにお金を貸すのは許されないんＤＡ！』ということだろうか？それとも早く仲直りさせたほうがいいとか

そういう――

『その子をウチに泊めるのはダメなの～？』

あなたも敵でしたか我が母上！

まずい正直この展開は考えてもいなかった！

『あ、でもその子が嫌がってるならそれは無理ね～』

やった！いい感じのチャンスが訪れた！これに便乗するしかない！

「そうそう！後輩ちゃんが嫌が」

「いえいえ！私は全然ＯＫですよお母様！」

後輩ちゃん⁉机に突っ伏していたんじゃ⁉

僕の言葉はいつのまにか隣まで来ていた後輩ちゃんのシャウトに上書きされる。

『あら～今の声が噂の後輩ちゃん～？』

しまった気づかれた⁉

『ならその子から話を聞かないとね～電話かわってくれる～？』

ま、まずい！話をそらさなくては！

「い、いやその」

『代わってくれる～？』

「こ、後輩ちゃんが、その」

『代わってくれる～？』

「……え、えーと」

『代わってくれる～？』

ダメだ。こうなった母さんはどうやっても自分の意思を曲げない。もう何をしようと無駄だ。

このことは１８年間息子をしてきた自分がよく理解している。

「……後輩ちゃん。母さんが話したいんだって……電話代わってくれる？」

「はい！もちろんです！」

今まで見た中でもトップクラスの笑顔を咲かせ、心の底からうれし

そうな様子で後輩ちゃんは僕のスマホを受け取った。
そんな反応をされて、意識するなというほうが無理だ。
……だから嫌だったんだ、後輩ちゃんを家に泊めるのは。
……襲いたい衝動と性欲を抑えるデッドレースが始まるから。

この数分後、当然のように後輩ちゃんと母さんは意気投合し、後輩ちゃんのお泊りが決定した。
僕の耐久レースはこれからだ！（ヤケクソ）

第六話　お母様は優しいです

後輩ちゃんと母さんの会話が終った後。
サイゼリ○の会計を済ませた僕たちは一緒に帰宅した。
そして二十分後。何事もなく家に着き――
『は、はじゅめまして！』
帰宅途中の電車の中で冷静になり、初めて僕の家族と顔合わせすることになると気付いたためガッチガチに緊張した後輩ちゃんと
『あら～あなたが後輩ちゃんね～』
いつも通りなニコニコ顔な母さんも顔合わせも終わり
『夜ご飯まだ食べてないでしょ～？すぐに温めるからね～』
という母親の言葉で後輩ちゃんと一緒に夕飯を食べることになり
『どお～？お口に合うかしら～？』
『はい！とっても美味しいです！』
後輩ちゃんと母さんとの仲も上々で僕としてもホッとして
――そこまではよかったのだが
「ほら～これが中学生の頃のお兄ちゃんよ～」
「わあ！」
――なんで僕のアルバムなんて引っ張り出してきたんですか母さん。よりにもよって食事中に。
そして異常にギラギラした後輩ちゃんの目が怖い。
「それでこれが小学生の頃のお兄ちゃんで～」
「おお！」
遊びに来た友人にアルバムを見られるなんて苦行以外の何物でもない。
本来ならアルバムを持ってこられた時点で自室に逃げるのがいいのだろうが食事中のためそれもできず、できることといえば後輩ちゃんと母さんのはしゃぎ声をなるべく頭にいれないようにしながら羞恥心に耐えつつ箸を進めるだけ――
「これが小学生の時に料理で失敗して生クリームで全身がドロドロなお兄ちゃんよ～」

「――ねえちょっと待ってなんでそんな写真があるの？しかもなんでＡ４サイズ？」
そして何故それを後輩ちゃんに見せる。
「……ほう生クリームですか、大したものですね」
「ねえ後輩ちゃん？その手に持ったスマホでいったい何を撮影しようとしているのかな？」
「大丈夫よ～布教用に予備が何枚かあるから～」
「お母様！」
もうやだこの母親。
というかもう無理。これ以上この場にいたくない。
「……ごちそうさま」
「あら～そんなに急いで食べなくてもよかったのに～」
「誰のせいだと思ってるんですかねぇ……」
純真無垢にニコニコしやがって。
しかもこれでも僕をいじめて楽しんでるんじゃなく、純粋にアルバムを見せたいから見せているあたりうちの母親はめんどくさい。
「……はあ、それじゃ勉強してくるから」
「あ～それなら妹ちゃんにそろそろおやつの時間だって伝えておいて～」
「了解」
リビングにいないので自室に籠って宿題でもしているのだろう。
「え、先輩さん⁉妹さんがいたんですか⁉」
階段を上ろうとした僕を後輩ちゃんの声が引き留める。
「……言ってなかったっけ？」
「聞いてないですよ！」
そういえば言ってなかったか。別に隠すようなことでもないので、言う機会が今までなかったのだろう。
「６つ下に小学生の妹がいるんだ」
「今は自分の部屋で宿題してるわよ～後で紹介するわね～」
「は、はい！」
ちょっと緊張しているようだが、今の後輩ちゃんなら妹とでも仲良

くなれるだろうと安心して今度こそ二階へ向かう。
「そ、それでこの写真は……？」
「それは幼稚園の初めてのお使いで道に迷って涙目になってるお兄ちゃんよ～」
「やだ……かわいい……！」
……やっぱり後輩ちゃんを家に連れてきたのは間違いだっただろうか。

その後、下の階でどんな恥ずかしエピソードが暴露され続けているのかに悶々としながらも無理やり英単語を頭に詰め込み続け、気が付けばもう十一時。いい加減疲れてきていたので、休憩がてら一階のリビングに降りる。
そういえば後輩ちゃんは妹と仲良くできているだろうか？うちの妹は基本的に誰とでも仲良くなれるので、仲違いしているようなことはないと思いたいがはたして――
「おりゃー！ぶっころしてやれー！」
ずばばばば
「そんな言葉を使う必要はないよ妹ちゃん！なぜなら私たちがそんな言葉を頭の中に思い浮かべた時には！実際にぶっ殺しちまってもうすでに終わってるかだッ！だから使ったことがねェーッ！」
「すごーい！何かわからないけどすごーい！」
べしゃん
「やっちゃえー！」
「そのスプラシューターの性能を生かせぬまま死んでいけェー！フハハハハハ――あびゃん！」
「妹に変な言葉教えないでね後輩ちゃん」
後輩ちゃんのことを心配していたら実の妹に変な言葉を吹き込んでいたでござるの巻。
これ以上変なことを言われても困るので頭を新聞でたたいて落ち着かせる。
「あ、お兄ちゃんお疲れ様！」

「……うんまあ疲れたのは事実かな」
反抗期なんて知らんと言わんばかりの無邪気な笑顔をこちらに向けているのが僕のただ一人の妹。現在小学六年生。後輩ちゃんとは真反対の活発少女である。
「……なんか失礼なこと考えませんでしたか先輩さん？」
「うちの妹はかわいいなって」
「……まあそれには全面的に同意しますけど」
わかってくれてうれしいよ。
「……というか大丈夫だよね？うちの妹に変なこと吹き込んでないよね？」
「何言ってるんですか。この私がそんなことするわけないじゃないですか」
さっきまでの暗殺チームのようなセリフを覚えてないのかこの子は。
後輩ちゃんに聞いても分からないので、
「……本当に大丈夫だった？なにも変なことされてない？」
「しつこいですよ先輩さん！」
我が愛おしの妹に再確認。後ろで後輩ちゃんが何か言っているようだが気にしない。
そんな俺の質問に、妹は満面の笑顔で言った。
「ううん！すっごく優しくしてくれた！さすがお兄ちゃんのお友達だね！」
天使かこの娘。
「……先輩さん、妹のお持ち帰りってありますか？全財産はたいてもいいので」
「そんなものはないし例えあったとしても現在進行形で家出中だったよね後輩ちゃん？」
というか誰にもあげない。
「あら～勉強は終わり～？」
そんな話をしていると、手を拭きながらこの家の最高権力者がやって来た。

「……確かに今日はもう終わりでいいかも」
色々とありすぎた。だいぶん疲労がたまっている。
「それじゃあお風呂入ってきなさ～い。お兄ちゃん以外はもう済ませたから～」
「はーい」
特に断る理由もないので、さっさと浴場に向かう。
今日一日分の疲れをしっかり癒さなくては――

・後輩ちゃん目線
――先輩さんはお母様に促されてお風呂場に向かった。
この家に来てまだ数時間だけど、それでもこの家はすごくあったかいことはわかった。
先輩さんのお父さんは単身赴任でなかなか帰ってこれないらしいけど、きっとそのお父さんも優しい人なんだろう、そう思わせるような雰囲気がこの家にはある。
……自分の家を悪く言うつもりはないけれど、それでもこんな『普通の家庭』は羨ましい。私の家は良くも悪くも『特別』だったから。
そう考えながら自分の父親にメールする。……さすがに先輩さんの家に泊まっていると言うのは恥ずかしいので『友達の家に泊まっている』とぼかしながら。
妹ちゃんのゲーム音をバックに、一通り目を通してから送信ボタンを押し一息つく。
「連絡はできた～？」
そんな私の様子を見てか、先輩さんのお母様に確認された。
「はい。……とは言っても、連絡したのは父親にですけど」
「別にいいのよ～お母さんとは連絡しずらいでしょうしね～」
ほんとにいい人だなぁお母様……
私が最初に挨拶した時も、家出した理由も聞かず、ただ『親にちゃんと生存報告だけはしておきなさ～い』としか言わなかったし。
……本当に、私の母親もこれくらい物わかりのいい人だったらよ

かったのに。
「……」
「……えっと、なんでしょうか？」
そんな私の思考をよそに、なぜかこちらをじっと見つめるお母様。
なにか失礼なことでもしてしまっただろうか……？
そんな風に不安に思っていると、最初にあいさつした時から変わらないニコニコ顔でお母様は言った。
「聞きたいことがあったのだけれども～お兄ちゃんがいないし今がちょうどいいわね～」
？
そう言うとお母様は私の隣に座り、噂話をするような体制で私に密着した。
「それで～？どこまで進んでるの～？」
「え？どこまでって……」
一体何の？
だが私がその答えに到達する前に――
「そりゃあもうお兄ちゃんとの関係のことよ～」
「……ふぇ？」
お母様はとびっきりの爆弾を投下した。
「もうあんなことやこんなことはしたの～？ＡＢＣＤのどこら辺～？」
さっきより気持ち輝きを増した笑顔でお母様は言う。
……先輩さんとの関係？あんなことやこんなこと？ＡＢＣＤ？
……それって私と先輩さんが【自主規制】や《ちょめちょめ》をしたかってこと？
……ふぇ？
「いいいいやいやいや！そそんな先輩さんとなんてそんな進んででないですよほんとですよそんな！ま、まだキスだってしてないですしその！」
「あら～、もうその反応だけで十分わかるわ～」
「ち、違いますほんとに！」

「わかってるわよ～わかってる～」
「絶対わかってないですよそれ！」
だってまだ顔が『私はわかってる』て感じの顔だもん！
そんな私のテンパりぐあいを見て満足したのか、お母様はお茶目な顔で言った。
「ふふふ、さすがに冗談よ～ちょっとからかっただけ～」
「し、心臓に悪い冗談言わないでください！」
本当に心臓に悪い！
「でも～お兄ちゃんのことが大好きなんでしょ～？」
「うぐ」
そ、それは……
何とかごまかしたいけど、ここまでいろいろボロだしちゃったし……
お母様には知ってほしいのもあるし……
「どうなの～？」
「……は、はい。私は先輩さんが大好き……です」
「ふふ、でしょうね～」
「うう……」
すっごい恥ずかしい……
お母様に言うのにこんなに緊張するのに、先輩さんに告白するときになったらどれだけ緊張するんだろう……
「……でもそうなの～まだ付き合ってないのね～」
「は、はい……」
一見いつも通りなお母様の言葉に同意する。
でも……なぜだろう？なぜかお母様は落胆している？ように感じる。
そんな私の様子に気付いたのか、お母様は切り出した。
――さっきまでとは違う口調で。
「……お兄ちゃんから聞いた？あの子の『初恋』のこと」
「……え？」
先輩さんの『初恋』て……あの文化祭で言ってた？

「その様子だとまだ聞いてなかったかしら？」
お母様の口調の変化と、それよりなによりその話の内容に衝撃を受ける。
「……高1の時、あの子相当大変な経験をしてね……下手したら一生のトラウマになりかねないような経験を」
思い出されるのは文化祭。あのときの先輩さんは不安そうで、
「そのせいで一時期は大変で……今こそ周りと本人の力で回復したけども」
心の底から悲しそうで、
「そのせいであの子はもう『恋』をできないんじゃないかって――私も周りの人も、たぶんあの子自身もそう思ってたの」
本当に苦しんでて
「――でも、あなたはここまで来てくれた」
私はそれが悲しかった。
「あんなに悲しい思い出を、塗り替えられるかもしれないくらいにあの子と近づいてくれた」
一刻も早く救ってあげたいと思った。
「だから、あなたさえよければ、話そうと思うの」
だから、先輩さんに何があったのかを知れれば
「あの子の『初恋』のことを」
いますぐにでも先輩さんを助けられるんじゃないかって思った。
「……どうかしら？」
だから、そんなもの、最初から、答えなんて、当然――
先輩さんに何があったのかを知る。それ以外に選択肢はないと――

――そんな中、思い出したのは最初の時。
先輩さんと出逢って恋をしたあの日。
あの日からずっと私は先輩さんに依存して。
先輩さんはずっとそんな私のそばにいてくれて。
きっと自分の方が苦しかったのに、いっつも私の相談を聞いてくれて。

自分はきっとずっとトラウマに苦しんでて
それなのに文化祭で私にトラウマをえぐられて、
それでも声を振り絞って約束をしてくれて――
――ああ、そうか。
「……文化祭の時にですね？先輩さんが言ってくれたんです」
お母様はじっとこちらを見ている。
『まだ今は言えないけど』『いつかきっと話す』て」
その目を見返しながら、先輩さんのことを思いながら、はっきりと言い切る。
「……私は待ちます。いつか先輩さんが話してくれるまで」
――先輩さんを信じていますから
「……だから、ごめんなさい。いまはその話を聞けません」
意味のないことなのかもしれないけど、
先輩さんとの約束を、私は守っていたいから。

「……ふふ、そう。それなら大丈夫そうね♪」
しばしの間の後、お母様は笑顔でそう言った。
「これからもうちの息子をよろしくね～」
「……はい」
口調の戻ったお母様に、はっきりと答えを返す。
自信なんてないけれど、絶対に先輩さんを幸せにしてみせると誓って。

「はい！それじゃあまじめなお話はおしま～い！」
そんなシリアスな雰囲気を一変するように、手を一回たたいてから
お母様は朗らかに話を切り出した。
「ここからもう一つの本題があるの～」
「え？」
さっきとは違う意味で軽く驚く。
もう一つの本題？それっていったい何？

「後輩ちゃんはお兄ちゃんの好感度を上げたいでしょ～？」
「は、はい。そりゃ……」
もちろんできるものならしたいけど……
「そこで相談なんだけど～」
「な、なんでしょうか？」
「お兄ちゃんと一気に親密になる作戦があるんだけど～やる～？」
「……え、えー」
な、なぜだろう、微妙に嫌な予感が……というか一気に親密になるってめちゃくちゃ胡散臭い気が……
私が返答に困っていると、お母様の顔がみるみる暗くなっていく。
「そうよね～こんなおばさんの作戦になんて興味ないわよね～よよよ～」
そういって泣きまねを始めるお母様。
い、いや！この優しいお母様のことだ！きっといい作戦に違いない！
というかすごい罪悪感あるから受けざるを得ない！
「わ、わかりました！その作戦を聞きます！」
半ばやけくそになった私はノリノリでお母様の作戦に乗ることにした。
「わかったわ～！それじゃあ耳を貸して～」
「はい！」
――――――後輩ちゃんはまだ知らない。
「え⁉こ、これ着るんですか⁉」
「そうよ～これだけよ～」
――――――この作戦によって、案の定黒歴史が増えることに。

第七話　二人の夜

――お風呂場では特に何も起きなかった。
風呂に入る前に、母さんの方から妙に嫌な気配が漂ってきていたので警戒していたのだが……杞憂に終わったようだ。
……決して後輩ちゃんとのハプニングを期待していたわけではない。
……後輩ちゃんのバスタオル姿を見たかったわけでもない。
ないったらないのだ。
「……ん？」
しかしお風呂から上がってみれば、その後輩ちゃんはリビングにいなかった。
「あら～もう上がったの～？」
てっきりまだゲームでもしているのかと思っていたので少し驚いていると、キッチンからひょっこりと母さんが現れた。
「後輩ちゃんは？」
「あの子ならもう寝室に行ったわよ～だいぶん疲れてたみたいだしね～」
そうか。自分の事ばかり考えていたが、後輩ちゃんも親と喧嘩したりで疲れていたんだろう。今日はちゃんと休んでほしい。
そして僕もさっさと寝ようと自室に向かう途中――
「……そういえば、後輩ちゃんどこで寝てるの？」
ふと気になり聞いてみる。
「……」
「……母さん？」
てっきり普通に母の部屋か妹の部屋で寝るんだろうと思っていると、母さんは微妙に目を躍らせていた。
「……母さん？」
「大丈夫よ～大丈夫なのよ～」
「え？」
「お兄ちゃんが気にするようなことは何も無いのよ～」

「う、うん分かった」
「だから今日は早く寝ないと～」
「アッハイ」
一体何が大丈夫なのかは分からないが。
何かごまかすような様子の母さんを後にして自室の前までたどり着き、何のためらいもなくドアを開ける。今日はさっさと寝ないと――
ガチャ
「せ、先輩さんはこんなものを！こ、これってやっぱり、こういうことをしたいってこ――」
バタン！
「……」
……僕は何も見ていない。
……そうだ僕は何も見ちゃいない……何故か僕のＴシャツを着て厳重に保管されているはずの僕のＲ１８本をベッドの上で熱心に読み漁っていた後輩ちゃんの姿なんて見ちゃいないんだ。
……だから次この扉を開けたらシュレッティンガーのネコな理論でなかったことになっているはず。
……というか僕の幻覚であってくださいお願いですなんでもしますから。
ガチャ
「や、やっぱり先輩さんは黒髪の方が好きなのかな……？なんか黒髪の人のが多いし……」
クッソ！やっぱり現実だ！
「あ、や、ややっぱり胸でこするのがす……好きっぽい……こ、こんなのがいいんだ……」
しかも性癖の分析までされてる。
「ま、まだこんなたくさん……！で、でも先輩さんに気持ちよくなってもらうために頑張らないと！」
もう頑張らなくていいです後輩ちゃん。というかもうすでに僕に大ダメージが入ってます。

そしていったいナニを気持ちよくするのか。
「つ、次の本は……あれ？」
次のエロ本を探そうとした後輩ちゃんが何か違和感を感じたのか、この部屋の扉を見る。当然そこには形容しがたい顔をした僕がいるわけで――
「……ふぁ？」
「……」
まあ、こうなるな。
しばしの沈黙。そしていつも通り――
「せせせせ先輩さん⁉いつの間にそこに⁉というか何故みてるんです‼入るならそう言ってくださいよ！」
「イヤなんでって言われても」
ここ俺の部屋だし。あんな状態の後輩ちゃんに声はかけられないし。というか後輩ちゃんが中にいるとかそんなこと夢にも思わなかったし。
「お、女の子のいる部屋にノックなしで入るとかそんなことしちゃいけないんです！」
「……そもそも後輩ちゃんが僕の部屋にいるなんて知らなかったんだけど？」
「そ、それくらいは扉の前で察してください！」
「……」
いつも通りに慌てふためきながら無茶苦茶なことを言う後輩ちゃん。その姿はいつまでも見ていたいぐらいにかわいいが、とりあえず僕としては絶対に言わないといけないといけないことがある。
「……ところで後輩ちゃん」
「は、はい⁉なんでしょ」
「そのベッドの上に散らばっている本はどうしたのかな？」
「」
――そう、僕の珠玉の春画本の話だ。
僕の声に言い知れぬ恐怖を感じたのだろう。後輩ちゃんはめちゃくちゃ目を泳がしながら答える。

「こ、この本はですね？そのベッドの下を見たらたまたま見つけましてね？どんなものか気になってその……」
「うんうんそうかそうか」
　確かにそれらの半分はベッドの下に置いていたものだ。
　だが――
「あれれ？おかしいな？このあたりの本は机の引き出しの底に入れてたはずなんだけど？」
「そ、それは……そ、そう！たまたま机の引き出しが開いてて！」
「それにこっちのは参考書の間にきっちり置いてたはずなんだけど？」
「ぐ、偶然その参考書だけ本棚から飛び出してててて！」
「これなんて机に鍵付きでしまってたんだけど？」
「そそそれは……た、たまたま偶然不運にも鍵が壊れてまして！」
　カチャ！
「……普通に使えるけど？」
「え、えーとえーと！そうだ！その時なぜかその鍵が開いてt――」
「こ　う　は　い　ち　ゃ　ん　？」
「ひゃい⁉」
「い　い　加　減　に　し　よ　う　か　？」
「ご、ごめんなさい！」
　ぷるぷる震えながらの後輩ちゃんの謝罪。さすがに悪いことをしていたのだという意識はあったらしい。だが今回ばかりはそんな事では許さない。
「女の子には分からないかもしれないけどね？こういう本は男子にとって絶対に必要なものなんだよ？」
「……はい」
「そしてそれを隠すのは自分の心を守るためなんだ。それを無理やり暴くのがどれだけ僕たちの心を傷つけるか後輩ちゃんにわかる？」
「……はい」
「それを自分の好奇心だけで見るのがどれだけ重罪かわかるかな？」
「……はい」

「本当に分かった？」
「……はい。もうしません。好奇心から部屋を漁ってしまい本当に申し訳ございませんでした」
……もう大丈夫かな？
こちらも言いたいことを言えたので少しスッキリした。この心の傷は癒えないが。
そんな風に自分に余裕ができると後輩ちゃんの様子も気になってくる。
後輩ちゃんは、僕の怒りが伝わったのかさっきからずっと体をプルプルさせて唇も青い。しかもなぜか鳥肌が立っていて――
「くしゅん！」
「――て後輩ちゃん！なんて格好してるの！」
今更ながら後輩ちゃんの格好に気付く。後輩ちゃんは僕の半袖Tシャツを着て、それ以外に何も着ていない。
「おお母様に、ここの格好なら先輩さんにす好かれれるって。ででででもさ寒いですすねこれ」
「そりゃ真冬だからね！」
ぶっちゃけ女の子のそういう格好は大好きだけど！そんな寒がってたら萌えるものも萌えないよ！
「ほら、僕のジャージ貸してあげるから！早く着て！」
「……ふぇ⁉？せ、先輩さんのジャージ⁉？」
「風邪ひくよりはましだから！僕ので我慢して！」
「は、はい！」
そう言って後輩ちゃんにできるだけ新しいジャージを渡し、後輩ちゃんの着替えを見ないようにしながら散らばった聖本を迅速に片付ける。
……隠し場所は今度変えるとしよう。
「お、終わりました！」
僕が全ての聖なるブックス！を収納し終えると同時に後輩ちゃんの着替えも終わった。
「……うん。問題は無さそうだね」

そこにはちゃんとジャージを着こんだ後輩ちゃんがいた。ただ、僕のジャージなので後輩ちゃんの体格に合ってない。袖がけっこう余ってる。萌え袖かわいいです。

「……」（ぽー）

「……大丈夫？違和感とかない？」

なんともボーとしてる後輩ちゃん。なぜか袖に顔をうずめたりしている。

なにか問題があるなら言ってほしいのだが……

「……」（ぽー）

「……後輩ちゃん？」

……反応が無い。一体どうしたのだろうか？

仕方がないので近くによって後輩ちゃんの名を呼ぼうとすると――

「ふへへ……しぇんぱいさんのにおいだぁ……」

そんな恍惚とした声が聞こえた。

……今日ガード緩いなぁ後輩ちゃん。そしてそんなこと言われたらこっちも意識を――

「……あ」

「……」

ほらこうなる。

もういい加減後輩ちゃんが暴走するのは目に見えてるので先手を打つ。

「しぇ、先輩さ――」

「後輩ちゃん！」

一拍おいて

「……もう今日は寝よ？ね？」

「……はい」

赤い顔で目を伏せながら後輩ちゃんも答えてくれる。

……いちいち動作がかわいいんだよなぁこの娘。

……マズイ、けっこう今のでムラムラきた。

「それじゃあ僕はもう寝るから――」

この感情が後輩ちゃんにばれないために、さっさと後輩ちゃんから離れよう。
そこでふと気づく。さっきリビングで口にした疑問だ。
「――ねえ後輩ちゃん、後輩ちゃんは今日どこで寝るの？」
「……」（ぴくっ）
僕の質問に後輩ちゃんの体が跳ね上がる。この反応でだいたい分かった。
「……もしかして、僕の部屋で寝るつもりだった？」
「……！」（ぴくっぴくっ）
嫌なところで予想的中。この反応を見る限り二人で一緒のベッドで寝るために僕の部屋にやって来たのだろう。そしてそんなことは僕の精神の安寧のためにも絶対にさせない。
「はぁ……後輩ちゃん？さすがに一緒に寝るとかそういうのは高1なんだからダメ――
「せ、先輩さん！」
「うおっ」
説得しようとした僕のお腹に後輩ちゃんの頭が突き刺さる。それほど痛くはないが、結構なスピードが出ていたため受け止めきれずにベッドに倒れこむ。
「……」
「……」
それによって後輩ちゃんに押し倒されたような形になり、後輩ちゃんとの視線が絡み合う。
さっきより厚着をしているはずなのに異常なほどに後輩ちゃんのぬくもりや柔らかい体の感触を感じる。そして何より後輩ちゃんの赤みがかった顔がとてもとても妖艶に思えて――
「ッ！」
襲ってしまいたい気持ちを無理やり抑え込む。
――そうだ、まだそんなことをしちゃいけない。いくら後輩ちゃんがいいとしても、
僕はまだ彼女のことを乗り越えてもいないのだから――

「……後輩ちゃん。動けないからさ、ちょっと動いてくれる？」
「……」
この状況を正すために、いつも通りを装って後輩ちゃんに声をかける。
そう、これが正しい。今の僕には、恋愛なんて――
「……ッ」
「……後輩ちゃん？」
――だが、後輩ちゃんは逆に僕に抱き着いた
体を上げようとするも、後輩ちゃんに上から押し付けられ身動きが取れない。
「後輩ちゃん、一体どうし――」
「……先輩さん、私じゃ、だめなんですか？」
涙目の後輩ちゃんの口からこぼれた言葉は、切なさの籠った一言だった。
「……先輩さんの中に、忘れられない人がいるのはわかってます。その人に、私がまだ勝ててないことも」
……後輩ちゃんの言葉に何の反論も出ない。当然だ。後輩ちゃんがいま放った言葉は、すべて真実なのだから。
後輩ちゃんに恋心を抱かれていることを知っていて
自分が後輩ちゃんに恋心を持っていることも自覚していて
それでも彼女から抜け出せていなくて、
「……でも、それでも、今だけは私を見てほしいんです、先輩さん」
――だから、後輩ちゃんの心に気付かない。
言葉にされてようやく気が付く。
「……これって、ダメなことなんでしょうか？」
後輩ちゃんがこんなにも勇気を出していて
「……ちょっとでも、先輩さんに近づきたくて」
僕のせいでこんなにも傷ついてしまって
「迷惑かもしれないけど、先輩さんを、少しでも慰めたくって」
たぶんずっと前から傷ついてて――
「だからお願いです、先輩さん。今だけでも――きゃっ！」

後輩ちゃんの言葉を遮って、体をひねり、今度は逆に後輩ちゃんを押し倒す。後輩ちゃんは状況が読み込めていないようだがそんなことは関係ない。
――ようやく分かった。僕のすべきことが。
「先輩さん……？」
――今までは、ずっと彼女のことを理由にしてた。
彼女のことを乗り越えてないから。たとえ後輩ちゃんのことが好きでも、僕にはまだ恋愛する資格は無いと。
――でも、そんなことは関係なかった。
「……後輩ちゃん」
僕のそのエゴのせいで、後輩ちゃんは傷ついていた。
僕に意識してもらえているのか分からない日々。僕は後輩ちゃんからの好意に気付いているのに、それがわからずに僕の返答を待つ日々。そんな時間を、僕は後輩ちゃんに送らせてきたんだ。
「……僕は、後輩ちゃんのことが好きだ」
――だから、もう終わりにしよう。こんな日々は。
「……ふぇ？」
「……いつからか分からないけど、後輩ちゃんのことが好きになっていたんだ」
後輩ちゃんはいまだに呆然としている。そりゃ急に告白されたら驚くだろう。
――僕の心は少し傷んでいるけれど、後輩ちゃんのために言葉を続ける。
「後輩ちゃんの気持ちにも気づいてた。後輩ちゃんと時間を過ごすたびに好きって気持ちが高まった」
後輩ちゃんの目に涙が貯まる。
「だから、もう心配しなくていい。後輩ちゃんはとっくに僕の最高に大切な人だ」
そう言い切って一息つく。多分、これでよかったんだろう。
「ッ！で、でも！先輩さんには……！」
後輩ちゃんがうれしさと悲しさの合わさった顔で言う。多分、後輩

ちゃんが言いたいのは――
「……うん。僕はまだ彼女のことを乗り越えてない」
「そ、それなら！」
「でも！」
後輩ちゃんの声を遮って僕の意思を伝える。
「今は後輩ちゃんの方が大事だ」
「……」
後輩ちゃんからの反応はない。後輩ちゃんがどんな感情を持っているかは分からない。
だから卑怯かもしれないけれど、あのことについても一気に話す。
「……2月29日に、話すよ」
「え……？」
「……僕の初恋を」
――多分その日が、一番話すのにいい日だから。
そう言った僕の目を後輩ちゃんは見つめる。僕もそらさずその目を見つめ返し続けた。
――どのくらいの時間が過ぎただろうか。何十分にも数十秒にも感じられたこの静止は、涙目の後輩ちゃんの言葉によって破られた。
「……ありがとうございます、先輩さん。私を、気遣ってくれたんですよね？」
柔らかく微笑んで後輩ちゃんは言う。
……さすがにばれてたか。
「……でも私、うれしいんです。やっと先輩さんの気持ちがわかって」
「……ごめんなさい」
僕の謝罪が面白かったのだろう、後輩ちゃんは唇をほころばせた。
「……ふふ、でもそんな先輩さんの気持ちを知っちゃったら、もう先輩さん言う2月29日まで我慢できないかもしれません」
「……ええ」
さすがにそれは勘弁してほしい。後輩ちゃんはいいかもしれない

が、こっちはまだ初恋を乗り越えてないし、そもそもこれから受験だ。
あと数か月だけでもいいから待って――
「――だから」
後輩ちゃんは今まで見たことないような女の顔で――
「今夜だけ、私に『好き』って気持ちをぶつけてください」
熱を帯びた声でそう言った。
沸騰しそうになる思考を無理やり繋げて答えを出す。
――つまりそれは、その
後輩ちゃんの、初めてをもらうということで――
「……いいの？」
僕の最後の問いかけに、後輩ちゃんは首をゆっくり縦に振った。
――ああもう！
こんなもの、我慢できるわけがない――！

――こうして、僕と後輩ちゃんは初めての夜を過ごした。
――そして当然のごとく翌日母さんにバレて、朝ごはんが赤飯になった。

第八話　自分のことを本編だと思っている短編集

＊赤飯に至る物語

――朝の光で目を覚ます。

妙な寒さを覚えながらも、頭の機能を起動させる。

えーと、今日は確か日曜日だから、塾はお昼から……でも、朝の間に宿題だけは終わらせて、ああ、いやならもうちょっとだけ寝ても大丈夫、あれ、なんで僕服を着てない――

「……んっ」

……ん？なんか布団の中にぬくもりが？

自分の感じた違和感を確認するため、特に何も考えず布団を開けると――

「……むにゃあ」

――そこには、何も身にまとわず寝息をたてる後輩ちゃんがいた。

「……ゑ？」

あれ？後輩ちゃん？なんでこんなところに？というかなんでなにも着てないん――

――そこで思い出す。昨夜のこと。

「……ああそうか」

確か昨晩は今までの反動かやたらと積極的だった後輩ちゃん相手にひたすらギッコンバッコン大騒ぎして――

「……ッ」

妙に恥ずかしくなり回想をやめる。

「ふにゃあ、しぇんぱいさん……」

「……かわいいな、ほんとに」

もぞもぞと体を動かす後輩ちゃん。そのしぐさがあまりにかわいく、つい声に出してしまう。

……こんな幸せそうな顔を見たら、自分のしたことが正しかったのだと実感できる。

「……さて、と」

いつまでも眺めていたい気はするが、さすがにこの格好のままなの

はマズイ。とりあえず脱ぎ散らされた服を回収して、後輩ちゃんを起こして服を着せて――
「ふわ、せんぱいさん……？」
「あ、起こしちゃった？」
布団から出ようとした弾みに後輩ちゃんを起こしてしまう。当の後輩ちゃんは目をこすりながらこちらを見つめている。
「ちょっと待っててね。今後輩ちゃんの分の服も――」
そう言って布団から抜けようとした僕を――
「ふにゃー」
「うわ⁉」
後輩ちゃんが抱き着いて布団の中に押し戻す。
「ちょっと後輩ちゃん⁉」
「ふへへ……先輩さんだ～」
まだ頭が覚醒していないのか、後輩ちゃんは普段はめったに出さない甘え声を出して僕の胸元に顔をうずめる。どうやら自分が裸であることも寝ぼけて気付いていない。
「ちょ、その体勢はまず……！」
いくら昨日の夜に比べて穏やかであるとはいっても、後輩ちゃんの体が男にとって非常に魅力的なのは変わらない。しかも後輩ちゃんは何も着ずに抱き着いているため、いろんなところがしっかり密着して――
つまり下半身が大変なことになってます、ハイ。
「ふへへへ……」
「早く起きて後輩ちゃん！いろいろとマズいから！」
「ふえ～わたひおきてまふよ～？」
絶対起きてない！そんな声出すことないもん後輩ちゃん！
そしてガリガリと削られていく自制心。普段からは考えられないほど無邪気に甘える後輩ちゃんを見ていると、だんだんと自分も好きにしていいんじゃないかと思えてきて――
「んっ！」
「！」

不意打ちで放たれたキスで理性が蒸発していく。
幸せを噛みしめるようにお互いを感じた後、ゆっくりと唇が離される。
「ふへへへ……先輩さんの唇、おいしかったですっ」
んもう！
ここまでされたらもうヤルしかないだろ！
自制心の吹っ切れた僕は未だに寝ぼけ眼の後輩ちゃんを押し倒す。
そしてそのまま――
「お兄ちゃーーーん！朝ごはんできたよーーー！」
――時間が止まった。
我が愛おしの妹によるダイナミック入室。
「」
「……」
その視線の先にあるものは当然――
「お母さーん！お兄ちゃんと後輩さんが裸で抱き合ってるーー！」
「うわあああああ！ちょっと待ってえええええ！」
そんな静止の声を聞かずに、我が妹は母さんのもとへ向かう。
どうにかして母さんのもとに行かせるのは止めたいが、全裸であるためそれもできない。
「すう……すう……」
そして一連の流れをぶった切って眠りにつく後輩ちゃん。
「……もうどうにでもなーれ」
そして僕は、考えるのをやめた……
――その十分後、完全に覚醒した後輩ちゃんが恥ずかしさのあまり大暴れするのはまた別のお話。
――そしてすべてを察した母さんに赤飯を出され、後輩ちゃんが真っ赤になるのもまた別のお話。

＊濃縮還元

後輩ちゃんのお泊りから数週間。季節は冬。十二月に突入した。

「今からテストを開始する！文句がある奴は目と耳をふさいで孤独に暮らせ！」

え？冬がなんだって？

今の僕には勉強しかない。

まあセンターまであと一か月だから是非もないよネ！

ちなみに後輩ちゃんとはお泊り以来一度も会っていない。さすがにこの時期は大変だとわかってくれたのか、後輩ちゃんの方から勉強に専念してくださいと言われたのだ。

……それはそれでちょっと寂しかったりする。

だが後輩ちゃんの期待を裏切らないためにも、今は頑張らないと。

「……ふう」

今日のテストも無事終わり、いつのまにか夕方になっていた。塾の休憩室で一休みする。

しばらくしてからコーヒーを飲み干し、さあ自習を頑張るぞと自習室に向かおうとすると――

「おや、奇遇だね。こんなところで会うなんて」

そこには僕のフレンズの一人、図書委員長が立っていた。

……なんだかすごく久しぶりな気がするな。

「……お久しぶり、委員長」

「ふむ、確かに久しく会ってなかったな」

図書委員長は文系、僕は理系。クラスも違うので文化祭以来会うことがほぼ無かった。

「というか珍しいね？委員長がここに来るなんて」

確かに彼女もこの塾で授業をとっていたのだが、ここ数週間まったく姿を見なかった。それも当然。なぜなら彼女は――

「なに、推薦合格確定の報告さ。もうここには来ないよ」

そう、すでに推薦で合格が決まっている。

文化祭あたりでもうほぼ確定だったらしく、文化祭準備で忙しい僕を何度も煽って来たのは記憶に新しい。
しかも推薦を決めた理由が
『早く彼氏といちゃつきたいから』
なのだからもはや手に負えない。
……ちなみにそのことをおちょくりつつ
『あなたは不純な動機で大学を決めるフレンズなんだね！すごーい！』
と言ったらガチ喧嘩に発展しかけた。
閑話休題。
「だったらさっさと帰って彼氏といちゃついて、どうぞ」
「それができたら速攻で帰るんだけどねぇ……」
ため息をつきながら不満顔な委員長。彼氏と何かあったのだろうか？
「なんでも研修で北海道に行っているらしい。まったく、私が何のために推薦を勝ち取ったと思っているのだ……」
なるほど。彼氏さんがいないのか。
口では強がっているものの、その雰囲気から本気で落ち込んでいるっぽい。
ふむ、ならばここは友人として励ましてあげるとしよう。
「はは！ざまあないぜ！」
「よし、表に出ろ。一夫多妻制去勢拳を見せてやる」
おっと本当の感情が表に出ていたようだ。
「まったく……受験疲れを心配して来てやったというのに」
「そんな雰囲気は一切合切無いけど？」
どうせ煽り目的で来たんだろコイツ。
「まあいい……それで？例の後輩ちゃんとはどうなのだ？」
……このタイミングでその話題か。
なんて言おうか。馬鹿正直に体を重ねましたなんてことは死んでも言えないし。
……よし、適当にはぐらかそう。というか最初からその選択肢しか

ない。
「ＨＡＨＡＨＡ！受験中にそんな何かあるわけないだろ？」
「ふむ？」
何故だろう。すごい怪しまれている。
「本当に何もなかったよ？」
「それは本当かい？」
「もち」
「ふむ……」
よし。何とかごまかせた。このままほかの話題にシフトしてピンチ脱出だ。
――と、そこで油断してしまったからだろうか？
そんな僕の思考は――
「さては貴様！童貞ではないな‼」

やたらと濃ゆい顔をした委員長の一言であっさりと瓦解した。
そして同時に平常心も宇宙の彼方へ吹っ飛んでいった。
「ふふ、その様子だとあたりらしいな！」
――てか往来でなんてこと言うんだコイツ！
そんな怒りで平常心が舞い戻る。
……コイツの反応からするとどうやら確信を得たらしい。今更そんなことを聞いてもどうしようもないことはわかっていたが、聞かずにはいられなかった。
「……なんでわかったの？」
「なに、女の勘を舐めないほうがいいというだけの話だ」
女の勘ならしょうがないな！
「しっかしこの重要な時期にそんなことするとか……どんだけ溜まっていたんだキミは」
「そ、そんな理由では襲わんわ！」
ジト目で言う図書委員長。
あ、あれは後輩ちゃんの思いに答えたくなったから……！（震え声）

「……ふふ、だがつまり、キミも少しは乗り越えたということかな？」
こちらの目をのぞき込みながら友は言う。
コイツだから分かり合える感情。一生残り続ける彼女との記憶。
未だに僕が乗り越えられていないこと。
少し前だったらその問に答えることはできなかっただろう。
だが今なら。
「……ああ、何とかなると思う」
後輩ちゃんと一緒なら。
「――そうか。その顔ならきっと大丈夫なんだろう」
そう言って微笑む委員長。
……本当に、いつもこうなら文句なしなんだがなぁ。
――その数分後。
「ふふふ、なかなかにいいことも聞けたし私はこれで失礼するとしよう」
「ん、そうか」
ひとしきり喋って満足したのだろう。委員長は出口へ足を向ける。
僕もそろそろ時間だ。久しぶりの会話はここで終わりだ。
「それじゃ、せいぜい勉強頑張りなよ？」
「あたりまえだ」
軽口をたたいてから委員長と別れる。
――こういう時期に気兼ねなく喋れる友人がいる。
そのことに感謝しつつ、今日も精一杯頑張ろう――
「あ、そうそう！受験終わったら絞りとられるから覚悟しときな！女の性欲甘く見たら痛い目に合うからね！」
「カエレ！」
……もうちょいましな友人が欲しいと思う今日この頃であった。

＊せっかくだから、俺はこの緑の店を選ぶぜ！
月日の流れは速いもので、今年もクリスマスがやって来た。

ただ、知っての通り我らは受験生。そんなものに浸っている時間など微塵もない。
――と、思っていたのだが
「先輩さんは何にします？」
「ソウダナー」
現在僕は後輩ちゃんとサイゼリ○にいます。
こうなった原因は十数分前のこと。
いつも通り授業を終え、家に帰ろうと塾の自動ドアを出ると――
「だーれだ」
待っていたのは後ろからの目隠し。
当然こんなことする人なんて一人しかおらず、
「……久しぶりだね、後輩ちゃん」
「お久しぶりです、先輩さん♪」
そこにいたのはやっぱり後輩ちゃんだった。一か月ぶりの再会だ。
「元気にしてた？」
「先輩さんこそ勉強は大丈夫ですか？」
「はは、大丈夫大丈夫」
「……ほんとに大丈夫ですか？」
ホントに大丈夫ならこんな乾いた顔はしないさ。
「それで、なんで後輩ちゃんはここに？」
「……私がここにいちゃいけないんですか？」
すこしすねた感じで後輩ちゃんは言う。
そういう意味で言ったわけじゃないんだけど……
「いや、後輩ちゃんの方から『一段落するまで会いません！』て言ってきたから……」
「うぐっ」
途端に顔をそらす後輩ちゃん。
もしかして、
「……我慢できなくなったとか？」
なんてね！さすがにこれは自意識過剰だろう。
「……」（お顔真っ赤）

マジですか後輩ちゃん。
「しょ、しょうがないじゃないですか！先輩さんメールの一つも送ってくれないし！」
顔を真っ赤にしたまま叫ぶ後輩ちゃん。
「あ、あんなことまでしたのに、あれから何もないし……」
……どうやらだいぶ寂しい思いをさせていたようだ。
確かに受験中とは言ってももう少し連絡を取ってあげてもよかったかもしれない。これは完全にこっちの不注意だ。
――なら、そんな寂しがり屋の後輩ちゃんには
「……後輩ちゃん、今から暇？」
「ふぇ？」
今日くらいはサービスしてあげようか。
「夜ご飯一緒に食べない？」
……別に僕が勉強したくないとかそういうのじゃないよ？ホントだよ？

そして冒頭に至る。
本当はもっと雰囲気のある所にしたかったというのが本音ではあるが、お財布事情でそれは断念した。
「どう？美味しい？」
「はい！」
満面の笑みでステーキとハンバーグを頬張る後輩ちゃん。冬になろうとこの食べっぷりは健在だ。
「あ、でも先輩さんの食べる量が……」
「ああ、別にいいよ」
後輩ちゃんはステーキを、僕はハンバーグを頼んだ。
だが運ばれてきたハンバーグを後輩ちゃんがあまりにもガン見するので、半分くらいを分けてあげたのだ。
「いえ！そうなると私が申し訳ないです！」
「そう？」
本当に気にしなくていいのだが……

「じゃあステーキちょこっとくれる？」
「はい！」
そう言って嬉々としてステーキを分ける後輩ちゃん。
だが、そこそこの大きさに切り分けた後輩ちゃんは、
「……」
「後輩ちゃん？」
何かに気が付いたように動きを止めた後、顔を赤くしながらステーキの刺さったフォークをこちらに向け――
「せ、先輩さん。あーん」
……そうきたか。
いや、別にそれ自体はいいんだ。後輩ちゃんの気持ちが伝わってくるし、周りの目線が少し恥ずかしいくらいだ。
――だけど
さすがにそれは一口じゃ入らない大きさだよね？
後輩ちゃんが切り分けたサイズは元の三分の一ぐらいの大きさ。どう考えてもあーんで差し出していい量ではない。
「……」（ぷるぷる）
だがそのことに気が付かないままフォークをこちらに向け続ける後輩ちゃん。こちらが食べないのを気にしているのか目には涙が貯まり始めている。
……しょうがない！
「はぐ！」
「！」
口をギリギリまで開けて、何とか一口で肉を詰め込む。
口の中がとんでもないことになっているが……うん、おいしい！
無茶苦茶苦しみながらなんとか飲み込む。
「ふう……お、美味しかったよ、後輩ちゃん」
「……先輩さん」
うん？
「そんな口に詰め込んで食べなくても……」
それをおまえが言うか。

そんな時間はあっという間に過ぎ、もうお別れの時間。
「すいません、ごちそうになっちゃって……」
「いいよいいよ、せっかく後輩ちゃんのほうから来てくれたんだから」
ここから数か月は後輩ちゃんと会えない。
……自分勝手だとは思うけど、そのことにかなり名残惜しさを感じている自分がいる。
「それじゃ、数か月後に」
「あ、は、はい……」
でも、数か月後にちゃんと後輩ちゃんと会うためにも今は我慢して――

そんな考えと共に後輩ちゃんに背を向け歩き出す。
「せ、先輩さん！」
そんな僕にかかる言葉。
『どうしたの？』と聞こうと後輩ちゃんへ振り向くと――
「んっ」
――その瞬間、狙いすまされたかのように後輩ちゃんにキスをされた。
不器用な後輩ちゃんの気持ちの伝わってくる。
時間にして数十秒のキスは、どちらからともなく唇を離すことで終了した。
「……頑張ってくださいね？先輩さん」
「……うん。頑張るよ」
……このキスが、後輩ちゃん自身のためのものなのか、それとも僕のためにしてくれたものなのかは分からない。
だけど、
「ありがとうね、後輩ちゃん」
「はい！」
このキスが、その愛情表現が、気持ちの落ちていた僕の動力源になる。
「それじゃ！頑張ってくるね！」

「はい！ファイトです先輩さん！」
後輩ちゃんのためにも――
明日も一日頑張るぞい！

第九話　癒しと暴走

――大学入試は、基本的に二段階で行われる。
一月中旬のセンター試験と、二月の本試の二つだ。
クリスマスに後輩ちゃんと会ってから数週間後にあったセンター試験、これは大丈夫だった。いままで塾やら学校やらで繰り返してきた模擬試験とほぼ同じ点が取れたのだ。
そして今日こそ本番、第一志望の前期試験の日である。
家族に見送られてから家を出る。
筆記用具、腕時計、受験票、カイロ、弁当、現金。すべて持っている。
全ては今日を乗り切るためにやって来たんだ。しようもないミスで一年を棒に振りたくはない。
――そして何よりも心強いお守りが一つ。
『がんばってください。応援しています』
今日の早朝、後輩ちゃんから送られてきたＬＩＮＥ。
本当にシンプルな言葉だが、それだけでやる気が出る。
「……よし」
さあ、戦いの時間だ。

――次の日。
窓の光で目が覚める。
時計を見るともう十時。だいぶ良く眠ったものだ。
――結局、昨日の本試は普通に終わった。
数学の解答を書く場所を間違えていたことに終了間際に気付いたり、物理で最初の問題が解けずにパニックになったりもしたがまあなんとか終えることはできた。
そして試験を終えると家に直行。後輩ちゃんと少しＬＩＮＥをした後夕飯も取らずにベッドイン。そのまま今まで爆睡していたのだ。
計十数時間寝ていたおかげで体はスッキリしたが、お腹が空いてしょうがない。この時間だったら母さんたちも起きているだろうし、

何か適当に作ってもらおう。
「……アレ？」
そんな時、急に何かが頭をよぎった。
……なにか忘れている。結構重要な何かを。
……僕の志望校の試験は一日で終わる。だから今日も試験でした！なんてことはない。
……じゃあ塾か？いや後期の勉強もあるけど、今日ぐらいは遊んでいいって――
……うん？遊ぶ？誰と？
「あっ」
もしかして。
急いでＬＩＮＥを確認する。そこには昨日の後輩ちゃんとのＬＩＮＥがあり――
『じゃあ明日、十時に駅前ですね。楽しみにしてます』
そこには後輩ちゃんと遊ぶ約束をしたＬＩＮＥが！
そして現在時刻は午前十時！
「??????遅刻!!まずいですよ！
（⊠ω⊠）うわあああああ」
こうして僕は何も食わずに服装だけ整えて家を飛び出したのでした。

「先輩さん。何か言いたいことはありますか？」
「少しだけ言い訳させてください」
――三十分遅刻して駅前に到着した僕に待っていたのは後輩ちゃんのお説教だった。
二か月ぶりの再会がこんな始まり方なのはどうかと思うが、今の後輩ちゃんは激おこぷんぷん丸なので下手に何か言わないほうがいい。
「……へえ、寝過ごしたんですか」
「ハイ」
「なら私の二時間近い待ち時間は無駄死にですか？」
「本当に申し訳ない。そうだ」

「本気で反省してます？」
してるしてる。
少しでも後輩ちゃんの機嫌を直そうと首を縦に振っていると、ふと一つのことに気が付いた。
……ん？二時間？
「……集合時間って十時だったよね？」
「そうですよ。だからこうして遅れた先輩さんに怒って――」
「……なんで二時間も待ってたの？」
「……あ」
僕の質問に、後輩ちゃんは顔を赤くさせる。
もしかして、もしかしてだけど……
「……楽しみすぎて、早く着すぎちゃった？」
「ッ‼」
どうやらマジで図星のようだ。
そっかーそんなに楽しみにしてくれてたんだー
「ち、違います！べべべ別に先輩さんと会うのが二か月ぶりだから早く会いたくて早く着すぎちゃったとかそんなこと！」
わーすっごいわかりやすい反応だナー
「……ほんとにごめんね？そんな楽しみにしてくれてたのに遅れちゃって……」
「だ、だから違います！」
うん。やっぱり後輩ちゃんはかわいい。
そんなかわいい後輩ちゃんのためにも今日は楽しませてあげなくては。
「それじゃあ待ってくれた二時間を取り戻すためにも早く行こっか？」
「話を聞いてください先輩さん！」
――こうして僕と後輩ちゃんは街に繰り出した。

――ＡＭ１０：４５
「いやーたこ焼き美味しいねー」

「……」（むすっ）
「あー、えっと」
「……」（むすっむすっ）
「……やっぱり、まだ怒ってる？」
「……知りませんっ、先輩さんのことなんか」
駅前から少し移動したところにあるたこ焼き屋さん。いい加減お腹が空いてヤバかったのと後輩ちゃんのご機嫌取りのために寄ってみたのだが……
「……」（むー！）
さっきからかいすぎたようで、なかなか機嫌を直してくれない。
いつもなら餌付けで何とかなるのだが――
「ほら、そこそこ値段が張って高校生には気軽に手の出せないたこ焼きだよ？食べなくていいの？」
「……いらないです。さっさと一人で食べちゃってください」
今日はさっきからこの様子である。これは相当怒ってらっしゃる。
「ほんとにいらないの？」
「いらないです」
「そう……」
「……」
「……」
「……」
やばい。すっごい気まずい。というか餌付け以外にどうやったら後輩ちゃんのご機嫌とれるか全然分からない。
そしてさっきから後輩ちゃんがたこ焼きをチラチラ見てる。やっぱり欲しかったのか。
具体的な解決案がでないままたこ焼きを半分くらい食べ終えた頃、いい加減耐えられなくなった。
「ごめんなさい後輩ちゃん！さっきは調子に乗りすぎました！」
こうなったらもう平謝りじゃい！
「……本当に反省してるんですか？」
よし、手ごたえあり！このまま押し切れ！

「反省してますから許してください！なんでもしますから！」
「ん？」
アレ？なにか後輩ちゃんの反応がおかしい。
なんか眼光が野獣みたいな。
「今何でもするって言ったよね？」
こちらの肩を掴みながら後輩ちゃんは言う。
指が食い込んで肩が痛いがそれ以上に後輩ちゃんの顔が怖い。
「い、言ったけど……」
「なら私、行きたい所があるんです！」
「あ、ちょっと待ってまだたこ焼き残ってるから！」
上機嫌でこちらの手を引っ張っていく後輩ちゃん。
どこに連れていかれるのか不安だが
「♪」
まあそれで後輩ちゃんの機嫌が直るならいいか。後輩ちゃんのことだしそれほどとんでもないところには行かないだろう――そう考えていた時期が俺にもありました。
――ＡＭ１１：０５
「さあ入りましょうか！」
「いやちょっと待ってほんとに待って後輩ちゃん」
「何ですかさっきは何でもするって言ったのに！」
「ほんとごめんていうか真昼間からここだけはないでしょ」
後輩ちゃんに連れられること十分。何やら怪しい感じの店が立ち並ぶ薄暗い通りを抜け僕たちの目に飛び込んできたのは妙に小奇麗でお城っぽい外見の外泊施設のような建物で――！
つまりはラブホです、はい。
「いやホントにダメだって僕たちまだ高校生なんだよそれがこんなところに」
「何ですか先輩さん！怖気着いたんですか！」
「いや怖気着くも何も」
「そもそも行為自体ならもうしたんだから場所が変わろうとも関係ないすよね⁉」

いやその理屈はおかしい。
なぜか猛烈な勢いで迫ってくる後輩ちゃん。何がここまで後輩ちゃんを駆り立てるのかと現実逃避気味に困惑していると、塾での図書委員長の言葉が思い出された。
『受験終わったら絞りとられるから覚悟しときな！女の性欲甘く見たら痛い目に合うからね！』
……
「後輩ちゃん」
「何ですか⁉」
キレ気味に返事をする後輩ちゃんに一つ尋ねる。
「……もしかして、我慢の限界？」
「当り前じゃないですか！どれだけ私が焦らされてきたと思ってるんですか⁉」
ＯＨ……
「だいたい何なんですか先輩さん！あんなことまでしておきながらその後ほったらかしとか！私が先輩さんと会うたびにどんだけ期待したか分かってるんですか⁉」
「で、でもさすがに受験中にそれは……」
「分かってますよそんなことは！でも！もうちょっと迫ってくれてもよかったじゃないですか‼」
若干涙目になりながら鬼気迫る勢いで後輩ちゃんはこちらに詰め寄る。
「ご、ごめんなさい」
「先輩さん受験中でしたし！一目見てすっごい疲れてるのもわかってましたけど！けど！」
一息ついて、後輩ちゃんは言う。
「何もしてくれないと、不安になるじゃないですか……」
絞り出すように出された弱弱しい声。それは確かに後輩ちゃんの本音なんだろう。
――正直、今回はどうしようないと思う。
浪人しないためにも、いち早く後輩ちゃんと向き合うためにも、受

験勉強に専念するのは最善で、それをきっと後輩ちゃんも分かっているのだろう。
分かっていてそれでも、気持ちを抑えられなかったのだろう。
その気持ちはわかるし、それを否定することなんてできっこない。
ならば男としてやることは決まっている。
「……後輩ちゃん」
「はい」
「……ごめんなさい」
「……本当に反省してます？」
「うん」
「……信じて、いいんですよね？」
「うん」
「……もっともっと、構ってくれますよね？」
「うん」
「……なら今からにでもホテルに」
「それはダメ」
いくらいい雰囲気でもその一線は超えてはならない（戒め）
「……ふふ、分かってますよ。少し意地悪でしたね」
「……少し？」
絶対に少しどころではなかった気がするが。というか目がガチだったが。
「今回は諦めます。いくら何でも急すぎましたし」
「うん。そうだね」
「それに、次は先輩さんの方から誘ってくれるでしょうしね？」
「……頑張ります」
「はい、頑張ってください」
ほんの少しスッキリした表情で後輩ちゃんは笑う。その笑顔は、やっぱり後輩ちゃんの表情の中でもとびっきりにかわいくて――
――そんな顔を見て、少しイタズラしたくなった。
「それじゃあ駅前に戻りましょうか。そこで少しぶらぶらしてからお昼ご飯でも――」

「後輩ちゃん」
「何ですか先輩さ――」
振り返った後輩ちゃんが無防備な顔を見せたところで――
「んっ」
「！」
後輩ちゃんの唇を奪う。
つまりは接吻した。
「ッ！ッ⁉ッ‼‼」
後輩ちゃんの体に手をまわして体を密着させる。
状況が飲み込めた後輩ちゃんが焦っているのが密着した体を通して伝わってくる。
この反応を見れただけでもイタズラとしては十分だろう。
――だがこの程度では終わらせない。
「ッ‼」
まだ混乱が解けきっていない後輩ちゃんの開いた口に舌を入れ、さらに深くキスをする。
そのまま密着し、後輩ちゃんを全身で感じる。会えなかった数か月分の埋め合わせをするように。
――そんなとろけるような時間は一分にも満たなかっただろうか。
「……ぷはっ」
「……」
いい加減息が苦しいだろうと頃合いを見て唇を離す。
個人的にも満足できたし、後輩ちゃんもこれで少しでも満足してくれたらと思いながら、いまだに密着している後輩ちゃんを見て――
「……」
「あ、あの、後輩ちゃん？」
どうも後輩ちゃんの様子がおかしいことに気付く。
息も絶え絶えで、顔は真っ赤で、目の焦点があってなくて――
……あれ？これもしかしてやりすぎた？
「こ、後輩ちゃん！ごめんやりすぎた！大丈夫⁉ちゃんと生きてる⁉」
猛烈に反省しながらぴくんぴくんとヤバそうな痙攣をしている後

輩ちゃんに声を掛ける。
「……ひ、ひどいですよぉ、しぇんぱいさぁん」
完全にとろけきった声で僕の声に反応する後輩ちゃん。
体には力が入っておらず、相変わらず目の焦点は合っていないが、とりあえずまともに反応が返ってきたことに安堵する。
「こんなのされたらぁ、がまんなんてできないじゃないですかぁ……」
「……うん。本当にごめん」
本気で反省しながら後輩ちゃんに謝っておく。
……今日だけで謝りすぎじゃないだろうか、僕。
その後、ベンチで休んで何とか後輩ちゃんは回復した。
――まだ僕と後輩ちゃんのお出かけは始まったばかりだ。